
騎士学校の俺と俺だけの姫様

アマリリスーアマガミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士学校の俺と俺だけの姫様

【Nコード】

N4688Y

【作者名】

アマリリスーアマガミ

【あらすじ】

騎士と魔法、少年少女が憧れて入学する学校へフェイトが選んだのは騎士学校だった。

「いつか出逢う俺だけの姫様を守るため」

少年は学び、出逢い、そして探す。

騎士になって姫を守りたい、小さな頃に憧れた物語。その主人公になりたくて。

そして学校に行きながらも自分の姫様を探すために西へ東へ暴走奔走。

果たして理想のお姫様は見つかるのか？

学園ファンタジーラブコメが始まります

序奏

ついに憧れだった学校、騎士養成所として名高い「ナイツオブラウンド」に今春入学した。

15歳で義務教育も終わり、自分の進路を決める時俺は迷わず騎士学校を選択した。

理由？そんなの簡単だ。

俺は、俺だけの姫様を守る。それが俺の騎士道だから。

全寮制で5年間一貫して学べるこの騎士学校は魔法学校と二分して人気の学校でもある。

総じて魔法を選ぶ傾向にある人は知識に優れ、また将来設計まで考えている人が多く、また魔法の扱いの難しさや発現力にどうしても才能という嫌な文字が付きまとうので、魔法学校はようするにエリート集まりと言い換えることもできる。

一方の騎士学校は単純だ。自身の努力で自分を磨けば将来王国への兵士として入宮もできるし、魔法師の旅に欠かせない相棒として組み、パートナーを得る事もできる。

他にも勿論学問を学び修める道もあるが、やはり少年少女にはカッコよさを求めるのが一番分かりやすい。

そんな訳でついに入学したのだが、

「うそだろ?!なんで今日に限って目覚ましが止まってんだよ!？」

そう、ある種現実逃避気味にこんな回想をしていたのは全力疾走で学校に向かっているからである。

晴れの入学式、クラス発表や新たな友人との出逢い、そんな春の期待に裏切られてしまっただけは騎士学校デビューは遠くなるどころか、

失敗に終わってしまう。

9時に入學式が始まるが、現在の時刻は8時55分。本当は8時30分には余裕で学校に着きクラス名簿が張り出された掲示板を周りの新入生と一緒にみて、そんな中で新たな出逢い、主に女子との出逢いなんかを期待したかったのに！

学校まで幸いに徒歩で行ける範疇ではあったが、徒歩1時間の道のりを10分で走れというのは中々に無茶だ。というより現実的に無理だ。

今朝奇跡的に目が覚めたのが8時45分、支度は5分で済ませ家を全速力で出立。5分程走ってみたが勿論間に合わない。

「仕方ない、緊急事態だし使うか」

そんな訳で焦った頭も走ってる内に明快になってきたので、頭を動かす。ようするに時間内に着けばいい。そうすれば予定とはちよつと違つが、騎士学校デビューは無事に済むはず。

キツ、と走ってる足を止めその場で息を整えながら精神集中。

「飛べー！リアウト！」

飛行呪文を唱えみるみる内に上昇していく。そして加速を思い切りつけ全速力で学校に向かう。

この飛行魔法の速さは術者にもよるが熟練した者が使えばそれこそ飛行機と同じような速度、つまり時速800Km、秒速に直せば200m以上にもなるので後4分しかなかろうが1分もあれば楽々着くのである。

「到着つと」

あんまり目立つといけないので校門付近、人氣が少ない通りへと着地する。

もうここまでくれば目と鼻の先、間に合った。

そう思い顔を上げると……

こちらを見つめる少女の顔があった。

金のストリートロングヘアはとても綺麗で、まるで絹を揺らしているように艶やかに揺れ人目を引き付けるが、なんととっても特徴なのはまるで吸い込まれるような深いエメラルドグリーンの瞳。

意志の強さを感じさせる瞳ではなく、どこまでも純粹な穢れを知らない無垢さがその深さを測ることを許さない。

一瞬、いや数秒は確実に目が合ってしまったがハッと我に返る。そうだよ！始業式！

しかしマズイ事になった。少女の白を基調としたローブ風の制服は恐らくこの付近に存在する全国最大規模の魔法学校のもので（有名なので学生ならば誰でも知っている）、もし自分の飛行魔法を見られていたのだとすればマズイ。

飛行魔法を使えば魔法学校では普通は飛び級どころか、すでに卒業レベルである。

だからこそ目立ちたくなくて使いたくはなかったのだが、緊急事態だったから仕方あるまい。（遅刻が緊急かは審議を掛ける必要がありそうだが）

魔法学校に進学しているのだとすれば、この魔法を習得した人物に対しては尊敬や羨望の眼差しで色々な質問に迫られるのが常。一秒も早く立ち去って始業式に行かないと…

…と思ったが少女は俺から視線を外すと塀の上に居座っている猫に視線を移す。

いや、もしかしたら俺が来る前からずっと猫を見ていたのかもしれない。

ただ、俺はそんな少女の行動が不思議で時間が惜しい中声を掛け、話してみたいと思ってしまった。

「俺の今を見て何とも思わなかったの？」

これではまるで自慢したいがために質問したみたいじゃないか！俺のバカ！！

すると少女はまたこちらに視線を戻してくれて答えてくれた。

「今の？高い所から落ちてきたよね？大丈夫？」

俺はこの瞬間会話がかみ合っていないと思った。というよりこの少女は多分天然とか人見知りとかじゃない。絶対に不思議系だ！

そうは思っても無言で立ち去る等騎士たる者ではないため、改めて言葉を発し会話を終わりにし、速やかに入学式に行こう。

「もしよければ今のは見なかったことにしてもらえると助かりますじーっとこちらを見つめたまま、数秒。その後返答はあった。」

「分かった。誰にも言わないよ。騎士さん」

つてこつちが騎士学校の生徒だつてちゃんと分かってんじゃない！不思議系かと思ったらちゃんとして知識はあるし。

とはいえ鮮烈な赤を基調とした制服を身につけ、学年毎に色が代わるネクタイをしているのだ。

この鮮烈な赤の目立ち方から言えば学校が分かってても不思議ではないが。

「ありがとう、魔法師さん。それでは俺はこれで」

左足を一步下げ少女に向かって傳く。騎士たるもの当然の礼儀である。

そして魔法師の少女は答えてくれた。

「私はリード・ロード。よろしくね」

手を後ろ手に回し、こちらを覗きこむようにいたずらっぽく視線を合わせてくる。

と、目があった時少女が少しだけ笑っていたような気がした。純粹な瞳に似合うような朗らかな笑顔で。

「俺はフェイト・セーブ。よろしく、リード」

姿勢を戻し握手を求めると、彼女は心地よく握り返してくれた。

もしかすると、これも今日の入学式という日がもたらした出逢いだつたのかもしれない。

しかし、現実は無常にチャイムが鳴り響きフェイトの遅刻が確定した。

その後リードと別れ、入学式には途中参加して悪目立ちするのモアレなのでクラス掲示板を一通り眺めて時間を潰していた。

「なんか、初日から不良じみてるな」

生徒がホールから出るのに合わせて紛れ込めば、まあ初日でみんな顔が分からないだろうしなんとか入学式に出たということにしておいてクラスに溶け込めるだろうという作戦だった。

一応ぐるっと回ってみたが、教師も、まして生徒は一人もいない。更には入学式ということで上級生も来ていないので、この学校に一人だけ取り残された感じまでしてしまう。

「あー、早く終わんないかなー」

幸い読書に向きそうな大木を見つけそこに陣取り背中を預けていたことで、春の日差しとそよ風を感じるという風流なことは出来ているのだが。

入学式は20分程か？そんな事を考えていたら、どこか遠くから鋭い風切り音が聞こえてきた。

周りを見渡してみるが、自分に向けられたものではない。それに恐らくこれは遠く恐らく弓によるものだろう。

「そういえば、弓道場もあったかな」

学校案内のパンフレットを流し読みしただけだが、施設は多くあり弓道場もこの学校には備わっていたはずだ。

「暇だし行ってみよっかな」

そもそも今日は上級生にとって休日だ。そんな中この朝から弓の練習のために学校にくるといふ行動を取る人物にフェイトは興味を持ったのだ。

「どんな人だろ？」

一定間隔開けて耳に届く音は鋭く清廉で、恐らくかなりの腕、的をみなくても実力が分かるだろう。そんな人物だと想像できた。

少し歩いて道場につくと、音は外の方から聞こえる。どうやら道場の外の射的場にいるようだ。

ちなみに、騎士の学校なのに何故か和を取り入れた施設がいくつもあったりする。剣道というのも和であるし、弓道も和である。これらを身につける時は騎士の鎧ではなく道着に袴という騎士？といいたくなくなってしまう格好になってしまいがそれでも剣筋や弓に西洋にない流廉さがあるのが人気らしい。

と、そんなことを思い出している間に目的の人物を見つけ――

「あれ？」

思わず声に出してしまった。

だって、あれだけ綺麗に等間隔に放たれた矢の音、無駄なく最速で的を射抜く技術の極み、そう思っていたが…

矢は一本も的に刺さっていなかった。

「誰?!」

そして思わず声を出してしまったがために、練習していた女性に剣呑な声で話しかけられてしまった。

「あ、えとすいません。誰かが練習しているみたいだったので見学させてもらおうと思ったんですが…」

女性の雰囲気には押され答えが弱気になってしまう。見ると目も怖い。よっぽど邪魔してしまったのだろう。

「今日は登校日でもないし、一年生は入学式よ。…でもあなた制服着てるし、何者？」

何者とは穏やかでない。これは真剣に誤解を解いた方がいいと思い、フェイトは必死に伝わるよう説明してみた。

「いや、新入生で入学式にきたんですけど、あーそのー遅刻してしまいました、それでホールに入りづらくてそれで時間潰してクラスに流れ込もうかと思ひまして、それでその時間潰してる間に弓の音が聞こえたもんですから見学させていただこうかなーと思ひまして、そんなんですよ。あ、あのー信じてもらえますか？」

ちよつとつかえつつだったのはこの方が焦っていることも、必死なことも伝わるだろうと思つてのことだった。

そしてどうやら、こちらが焦っている様子を見て先輩の方が落ち着いてらしい。

「そうか、すまなかつたな。驚かせてしまったら。私は九行なずな、見ての通り弓道部所属の4年生だ」

黒髪ポニーテールで長身のこの女生徒はどうやら上級生、それも自分とは三つ違いのようだ。

切れ長の瞳は挑戦的や不敵とも見えそうだが、この先輩からにじみ出る雰囲気からして普段は温和で面倒見がよさそうな先輩に見える。またスレンダーな体型に似合わずスタイルが抜群にいい。

努力家だろうし、本当睨まれなければファンもいるんじゃないのか？

「自分はフェイト・セーブと言います。すみません、集中しているところを邪魔してしまつて…」

申し訳なく謝る、今回の件で悪いのは自分だろう。秘密の練習に土足で踏み入つたようなものだから。

「こつちこそ悪かつた、ただサボりは感心しないな」

恐らく場を和ますための冗談なんだろうけど、なんだろう？この先輩に見つめられながらだと、試されているようにしか思えない。

「サボつたつもりではないんですが…まあその、遅刻してしまつた成り行きといえますか…」

ちよつと目が泳いでしまう。ここで軽口を返せるなら大人なんだろうけれど。

「いや、別に責めてるつもりはないんだ。ただ、初日からそれだと学校で苦労するぞ」

先輩が言っているのは自主訓練のことだろう。今寮にいる上級生の殆どは10日後の始業式まで帰省しているので訓練場にはいないが、自宅から通っている生徒も帰省している生徒もきつと早朝から訓練しているに違いない。

入るのは簡単だが、結果を出すのはとても難しい。

早朝から剣を振り、午前は勉強、午後は実習、放課後は部活で訓練、夜にもまた剣を振る。

それは騎士学校ではほぼ当たり前のように行われている暗黙のルール。

そうでなくては王宮への士官など夢のまた夢、ギルドへの加入や魔法師とのパートナーも全て実力がなければ務まらない。

これだけの訓練を積んで尚一人前になれないのが騎士なのだ。後は稀にみる才能、幼少からの積み重ね、もしくはこの暗黙のルール以上の努力のどれかが必然となってくる。

それを初日から遅刻等という暴挙に出れば先輩に心配もされよう。事実、退学者は年600名程出ている。1年生が殆どだが、中には体力が着いていかぬ者、周りとの差に諦める者、事故や怪我で騎士の道を断たれた者等も上級生から出ており現在この学校に新入生も含めた生徒数は1281名。

恐らく一月以内に100名は辞めていくだろう。騎士という華々しさに憧れてやってきた者が、挫折を味わう。それでも少年少女には魅力に映る程の華が騎士にも魔法師にもあるのが現代だ。

「大丈夫ですよ先輩。こう見えても俺騎士を真剣に目指してますから」

ちよつとだけ背伸びをして先輩に答えておく。これが知りあつて間もないのに心配してくれた優しい先輩への返事だ。

もつとお互いよく知り合っていたのならば、もつと深い話もできたかもしれないのが悔しい所でもある。

「そうか、なら頑張るといい。：先は長いぞ。良かつたらフェイトも弓道部を見学に来てくれ、また何か話ができたらと思つ」

そう言つて先輩はまた的に向かい直つて弓を構えた。

：行こう。

九行先輩の集中している姿を見ると、本当に見学して申し訳なかつたと思つた。

誘発

弓道場を後にしたフェイトは歩きながら時計に目を落として見る。

「お、意外に時間が潰れた。そろそろかな？」

待ちに待った入学式…は終わったからクラスメイトとの顔合わせだ。とりあえずばれないよう、さりげなく、さりげなく人波に乗って入学式に出ていないということを隠さねば。

校舎に隠れて少し待っているとガヤガヤとした話声といくつもの足音が近づいて来る。

『焦るな、焦るなよ。もうちょっと待つんだ。』列が膨らんできた所を見計らい急いで忍んで列に割り込む。

『よし！成功した！』これで列に紛れこめたのでこの波に乗ってクラスに行くまでである。

「えーつと俺のクラスは1-Gだから」

ここだな、もうすでにクラスには20人程集まっている。

「おはよー！」

とりあえず挨拶である。無論元気に！知り合いがいないんだ、皆だつていきなり敵を作りたくて入学したんじゃないんだから答えてくれるさ。

「おは…よ？」

あれ？おかしいな？なんで疑問形なんだろう？まあ挨拶してくれたから失敗つて訳じゃないだろうけど。

とりあえず一番近くにいた男子に聞いてみる。

「これって席とか決まってるのかな？」

よくみると少しホリが深く特徴的な顔立ちをして、大人びて見えるまあ、同じクラスの時点で年齢は同じなんだが、背丈も筋力も既に十分あるし男子としては羨ましい限りだ。

「いや、決まってるじゃないみたい。どこでもいいんじゃないかな？」

おお、意外にフレンドリーだ。なんか幸先いいかも。

「んじゃ一緒に座ろうぜ、これも何かの縁かもだし。俺はフェイト・セーブ」

「よろしくな、俺はゲイト・ユンだ。寮に入ってる、フェイトは？」
「俺は自宅からかな、1時間位だ」

「いいじゃないか、俺は自宅が遠すぎて寮は半強制的にだ、実家の方が落ち着くのかな」

「まあそういうなよ、寮だって仲がいいやつが一緒ならすぐ会えるってメリットもちゃんとあるんだから」

「ははっ、そりゃそうだ」

ゲイトは気さくな性格だったため、特に無理に話を繋げる必要もなく言葉がスラスラ出てきてキャッチボールが出来る。

うん、ホントにゲイトで良かった。

「そっぴやフェイト武器は？まさか素手なのか？」

お？ゲイトの目にかすかに好奇心が見える。結構聞きたかったのかな。

「いや、ちょっと事情があって今手元にないんだ。一応剣だよ」

「そうなのか」

一瞬だが視線を外されてしまった。多分武器は騎士たるもの常に持ち歩くべきという習慣からなのだろう。

事情があるとはいえ、代用品すら持ち歩かない騎士は珍しいというより非常識に分類される。

そんなのを耳ざとく聞きつけるのは、好奇心旺盛か、意地が悪いかのどちらかだろう。

そして皮肉にもフェイトに絡んできたのは意地が悪い方であった。

「代替品も持たずに登校してきただ？お前頭悪いつてかヤバイんじゃないねえか？」

ああ、面倒なのがきた。こっちは関わろうとなんて微塵も思っていないだから見逃してくれればいいのをなんで絡む。

どうせここで目立っておきたいんだらうけど、子供か。いや、15

歳は子供か。

「お前みたいなのはどうせ一月も持たないんだから早くいなくなつた方がいいぞ。机の無駄だ」

「言えてる言えてる」

おー取り巻き二人とは何とも古典的な。地元の奴らかな？どつちにしても金魚のフン連れてる時点で、リーダー格の器って計れるけど。「そういうことだ。まだ入学式終わったばかりで自己紹介もしてないんだ、お前なんか記憶のメモリーを割いてやる必要はないってこと」

この会話自体がそもそもメモリーの無駄では？人間の海馬には忘れるということはない。思い出しにくくなることは多くあっても忘れること自体はない。だからこそこの会話こそメモリーの無駄なんだが、というのはきつと通じないだろう。

と、ここで隣のゲイトが立ちあがる。

「お前らなんなんだ？勝手に絡んで勝手にわめき散らして、子供か」以心伝心とはこの事か、とフェイトが思いたくなくなったが向こうにあってそれは挑発以外何物でもなかっただろう。

「お前もなんだ？どうせこんな奴とつるんでる時点で負け犬っぽい」が、犬が吠えるな」

「ゲイト、よせ。こんなの相手にしても全く得にならない」

一応子供のわめきということを受け流せなくもないので、努めて冷静に言ったが意外にもゲイトが引つ込まなかった。

「俺が相手してやるよ、ダチを悪く言われて黙つたら男がすたる」そう言いつつゲイトが自分の武器であるランスを手取る。熱い、熱いよゲイト。いや、騎士学校って時点で熱い奴が多いのかな？でもあれ？目の前のこの変な人達は本当に騎士志望？

「あれつてもしかして侯爵家のナイト・ファブレじゃない？」女子って情報通多いよなーと無駄な感想を抱いた所で納得。だからこんなにプライドだけ高いのか。

みんな逆らえないから自分が特別だと勘違いしたまま育つ、親の教

育が良ければこうはならないと思うんだけどね。

「3人まとめてかかってこいよ」

ゲイトがもはやカッコよすぎる台詞を口にするが、正直止めた方がいい。侯爵ってことで分かる通り優秀な家庭環境下があればどんなに性格が歪んでいても実力はあつたりする。まして相手が3人ならば上級生対下級生でも軍配がどちらに上がるか分からない位のハンデだ。

仕方が無いので俺も立ちあがることにする。

「俺もやるよ、友達に任せたきりじゃ騎士の名がすたる」

しかし俺は気付かれないよう震えるこぶしを握り締める。

：ダメだ、武器がないとさすがに辛い。そもそもこの状況って3対2？多分俺が戦力にならないから3対1・5位かも。

と、状況分析をしていたら思わぬ所から援軍がきた。

「私はこっちに入る、あんた達こそ出て行きな。騎士たるもの他者に優しく自己を厳しく律する者。騎士の地位だけを狙うハイエナは騎士じゃない」

そういつて双剣の女生徒が自分の隣に立った。

「私ピア・ハルト、双剣士よ。あなた達は？」

そう言われピアという少女にフェイト達は目を向ける。

彼女も金髪だがショートに整えてあり、深紅の瞳は紅蓮を想わせる意志の強さを感じさせる。

あと、背が低いのに一部分だけ凄い発育してる。目がそちらにいかないよう注意しながら

「俺はフェイト・セーブこっちは」

「ゲイト・ユンだ。よろしくな」

これで図らずとも3対3のバトルの構図が完成した。：でもここは教室なんだけどな。ってかそろそろ先生くるんじゃないか？

と思った瞬間、

「先生、こつちです！」

「お前ら！何やってんだ！！」

のっぴきならない雰囲気を感じてか生徒が呼んできた威めしいハゲたおっさん、もとい先生が教室に駆け込んできた。

騎士学校の教師だけあって身分は元騎士であったり、ギルドのハンターだったりと猛者揃いの先生がきたのだからひよっこの1年生が束になっても勝てる相手ではない。

…良かった、無駄な争いは起きなくて済んだようだ。武器もないしホント避けられて良かった。

「決闘やるならもつと早く言え！それじゃHR代わりに全員校庭へ出る！こいつらの模擬戦で講義する！」

…訂正、このおっさんダメだ。

ハゲたおっさん、もとい先生の名はギルバード・カクイというらしい。1年間嫌でも付き合うから覚えておかないと。

そしてこの先生の下校庭にてゲイト、フェイト、ピアVSナイト、ストライク、リーの模擬戦が行われることとなった。

…神様を恨みたい気分だ。

さて、2分間作戦タイムを与えられたはいいけれどどうするか？

「俺はランスで中距離から牽制できる、ピアは？」

「私は特攻が専門。誰かを守りながらの経験はないから正直個人戦闘が楽なだけ。フェイトは？」

「俺は…今武器がないから正直相手を引き付ける位しか」

あ、二人の顔が苦痛に歪んだみたいになった。なんとかしてフォロ―しないと。

「ピア、剣を片方貸してくれない？そうすればなんとか…」

「無理、ないと感覚狂って下手したら大怪我しちゃうし。誰か貸してくれないかな？」

ピアが周りを見てみるのにつられフェイトも見渡してみると、やはり騎士学校だけあって剣の選択者は多い。

「あ、すみません、誰か剣を貸してくれませんか・・・」

「それは認められん、自分でなんとかしろ」

ピシヤリと先生に言われてしまった。…どうしろと？

「時間がない、どうする？」

「これじゃ3対2じゃない、いくらなんでもキツイわよ」

二人が焦ってきてしまっている。こうなればせめて作戦だけでも立案しないと勝負にならない。

「分かった、作戦を決めよう。相手は弓、重槍、剣とバランスがいから下手したら一方的に打ちこまれるかもしれない。だからこっちは各個撃破をお願いしたい。ゲイトはナイトの相手を、ピアは弓の相手を、俺が重槍の相手をする。相性で問題は？」

一応確認のための質問はするが、作戦自体はもう変更しないし出来る時間もない。

「俺は問題ないが」

「私も大丈夫、だけどあんた大丈夫？」

ハッキリ言えばキツイ。徒手空拳で近接武器最大のリーチを誇る重槍を相手にするなど体術が余程優れていないと勝機は0に等しい。

「俺がやるのは時間稼ぎが精いっぱいだ。だから二人を信じる、こんな俺のために戦ってくれる二人だからこそ信じるよ」

フェイトはゲイトとピアの目を真剣に見つめ、自身の覚悟を伝える。そして分かったとばかりにゲイトはやれやれと大きくポーズをし、ピアは頷いた。

「さあ準備は出来たか？それじゃ行くぞ……始め！！」

ギルバードの確実に面白がっている表情から、開始を告げる声が校庭に響いた。

「駄犬如き10秒もいらねえよ！」
ナイトが先陣を切ってこちらに向かってくる。

…迅い。どれだけ嫌な奴であろうがやはり実力で裏打ちされている者程厄介な奴はいない。

ゲイトが自分達を守る壁となりナイトへランスを振り下ろす、が剣で受け流され更に間合いを詰められる。

だが、ゲイトも訓練を積んではきているようでそう簡単には懐に入らせない、すぐさまリーチを戻すためバックステップに合わせてランスを振り払い追撃させないようにする。

一方ピアは重槍士をあっさり迂回し弓兵へと迫る。矢がいくつも迫るがピアの優れた動体視力、卓越した反射神経により全て弾き返して進む。

『俺もこうしちゃられないな』

重槍士がゲイト、ピアどちらかに向かうだけで戦局は一気に傾いてしまう。それを阻止するのが自分の役目だ。

重槍士を引き付けるためだけ、そう言い聞かせ自分に加速の魔法を弱めにつけ、その上で重槍士へ突進。

自身の速さからの体術では勝ちはないが、無視はできない。それ位で十分だったのであえて目立つ魔法は使いたくない。

重槍士は迎え撃つようにそのリーチと重量から有利な一撃を繰り出す。回避。

続けて流れるようになぎ払いが来るのでわずかに射程範囲外に下がり、払い終わりに懐へ飛び込もうと試みる。

だが、勿論許されるわけもなく斜め下よりの払いが跳躍を阻む形となり懐への侵入は失敗する。

『これでいい』

辺りへ目を配ってみると、見た所ゲイトが防戦一方で実力差があり

破られそうだが、ピアがもう弓兵の目前まで迫っている。
これならいける。

問題はその後だ。ピアの実力は1年生とは思えないほど卓越しているが、ナイトも負けてはいなさそうだし、はたしてタイマンで勝てるだろうか？

ゲイトには悪いが、ゲイトでは直に破られる。その時ナイトの相手を自分とピア、どちらが相手すればいいのかが問題だった。
武器さえあれば、自分も戦える、それが本当に悔しかった。

一応武器ならもうすぐ手に入る、ピアが弓をこちらへ持ってきてくれるだけでいい。だが弓では勿論不得手なためハッキリ言って今より牽制がマシになる位にしかない。

本当に今更ではあるが発端となった自身の剣さえ手元になれば――

頭の中に雑念が数瞬、数刻とよぎり始める。と、そこを捉えられた。

「スキありいー！ー！」

真正面から渾身の突きが飛んでくる。

やばいやばいやばい、直撃したら冗談ではすまない死のレベル。

死神が大きく口を開けフェイトの命を飲みこもうと――

キーン！

目の前の槍が何かに弾かれ軌道が大きくズレた。

おかげで顔の横を突く形となり死を逃れることができた。

しかしなにが？音がした付近を見ると、深紅の剣。ピアの紅蓮の剣の片割れが地面へと突き刺さっていた。

ピアの方を見てみると既に弓兵を無効化した後のようで、こちらに目を配った瞬間に剣を投げて助けてくれたのだろう。

嬉しくて涙が出そうになる。こんなついさっき知り合ったばかりなのにキチンと見て助けてくれた。誰かを守ったことがないなんて言いながらも。

だからこそ、応えなくちゃならない。

「ピア！ありがとう！！」

ピアの方へ視線だけ向けながら剣を回収しに地を滑るように走る。ピアはかすかにだが、安堵したような表情に見えた。なんだかんだでお人よしなのかもしれない。

さあ、応えよう、仲間への感謝を！剣さえあれば何とかなる。

問題は自身の力、強い魔力を伝えてしまったため並の剣では一撃で碎けてしまう、仲間の大切な剣を壊しては決してならない。

フェイトは地に刺さった剣を握ると同時に振り抜いた。

そこには既に引き戻された重槍が狙っていたからだ。だが、剣が手に入った以上もう問題ない。

加減しながら、それでも絶対に成功させるようギリギリの極致での一閃を繰り出す。

「ハアツ！！」

裂帛の気合と同時に振り抜いた剣は感触を感じずに空へと舞った。

しかし感触は感じなかっただけで、現実の事象はきちんと起こされていた。

音もなく中程からきれいに切断された重槍はもはや見ただけで使い物にならないと分かるほどのダメージを負い、重槍士の戦意を喪失させた。

そして観客にどよめきはしる。自分の武器さえ持ってきていない非常識な新入生が、騎士顔負けの斬鉄を行ったのだ。

これには先生であるギルバードですら目を瞠った。

「ピア、ありがとう。返すよ」

剣を受け取り易いように投げ返すと、ピアは条件反射で受け取るが目をパチクリさせている。

「ピア！ボーっとなしないで！ゲイトを助けなきゃ！」

その言葉にピアは数瞬の遅れを取り戻し、ゲイトを助けるべくナイトへの挟み打ちを決めた。

その後はもう一方的だった。3対1の上で、もともとピアが実力で競っていたためこれにランス、攪乱の自分の体術が入れば防戦からの反撃を許さずに勝ち切った。

「勝負あり!!」

ギルバードの高らかな宣言により、ここに決着がついた。

友人

「フェイトすごいじゃない！」

模擬戦が無事終わりピアがフェイトに称賛をかけてくれた。

「いくらなんでも斬鉄なんて無茶苦茶な技術どこで身につけてきたのよ？」

ピアにとってはそれが一番気になっているのだろう。剣技として斬鉄の難易度自体は高くはなく、早ければ2年生でも習得している者もいる。

ただし、実践で相手の武器を切断するという離れ業は最上級生が最下級生相手に10回に1度成功するかどうか位だ。

「おいおい、フェイトもし自分の剣持ってきてたら3対1でも蹴散らせたんじゃないか？」

ゲイトが気さくに話しかけてきてくれるが、フェイトはあいまいに笑って誤魔化した。

実際の所斬鉄自体は出来るが、先の斬鉄は厳密に言えば斬鉄ではない。

フェイトは巧妙にカモフラージュしていたが、実際は魔力で切断したのだ。

普通なら金属のすれ合う甲高い音もするはずが、無音で切り裂いたのが何よりの証拠でもある。

原理としては、ピアの剣にはもともと「炎」が宿る剣のタイプであり、フェイトはそれを活性化させて熔解に近い形での切断を行っていた。

剣自体の炎熱と、擦るような摩擦熱を加えて断面が熔解したように見えないよう偽装。

傍からみれば斬鉄だが、実際は溶かして切断した斬鉄もどきの出来上がりという訳だ。

ただし、ギルバード先生には見抜かれていたかもしれない。教師が魔力の発動に気付かない訳がないし、音が聞こえなかった事にも注意を払っていれば原理も見抜かれていただろう。

フエイトが何故ここまで魔法を使えることをひた隠しにしているのかは、魔法技術が高ければ高い程魔法学校を薦められる。

騎士、魔法師とどちらも人気があり華もあるが、それでも将来性を期待されるのは魔法師だからである。

国としては優秀な騎士よりも優秀な魔法師の方が欲しいという事もあり、予算も騎士学校より魔法学校の方が潤沢という事実もある。まして飛行魔法が使えるとなれば即実践投入やら、研究所へ送られる等学生とは無縁の活動を強いられてしまう。

それではダメなのだ、自分はいくまでも騎士を志望し自分だけの姫を生涯かけて守ると決めたのだから。

「よし、それじゃHR開始するぞ。今の模擬戦を見ての通りこっち側、あーっとお前ら名前なんだ？」

思わずクラス全員がずっこけかけてしまった。そういえば、自己紹介もなしに校庭に連れだされたら名前なんか分かるわけもないし。

「フエイト・セーブです」

「俺はゲイト・ユン」

「私はピア・ハルトです」

「という訳でフエイトチームの作戦は功を奏した訳だ。一人バカみに素手くるからにはよほど策を相手にはめないと今見たいな結果は得られないから気をつけるよ」

何故かダメだしをされてしまった。しかもあきらかに自分の事を言われている。

「一方実力で言えば総合実力が大体同じ位だったから明らかにナイトチームは作戦が悪かった」

あ、ナイトは知ってるんだ、さすが侯爵家。先生も覚えてくる位大

事なんだ。

「本来であればナイトも中盤で2・3で抑えた上で、弓を活かすのが作戦としては正解のはずだ。それを無視して自身の力を過信して無茶をするからチームのバランスが崩れ結果負けた。お前らもよく胸に刻んでおけよ」

やはり教師だけあって指摘も的確だし、何より解説が分かりやすい。これは当たりの先生だったかな？とフェイトが思っている。

「負けた方のチームは校庭20周、ほらさっさと行ってこい。休むな」

…訂正、スパルタだ。これは目を付けられたくないな、とクラス一同内心で冷や汗をかいた。

青空教室でのHRも終わり、解散となったと同時にフェイトの側に人垣ができてしまった。

「ねえねえ、さっきの斬鉄でしょ？もう1回見せて！」

「すごいな！あれだけの剣技は見たことがないよ！君フェイトだった？ここに来るまでは何を？」

「ねえ、そもそもなんであれだけ出来るのに剣を持ち歩いてないの？」

などとすごい有様になってしまった。

邪険にしたくはないが、まずはチームメイトに挨拶とお礼をしたいので何とかかわすことにした。

「斬鉄はまぐれだよ、それに練習だってそこそこだし、剣は事情があつて預けてあるだけだから。つとごめん、俺あの二人と話したいから今日はここまでで勘弁してくれ」

するすると質問に答えながら、人垣を泳ぎきるとゲイトもピアも待っていてくれた。

「よっ、意外に早かったな」

「ヒーローインタビューだし、もうちょっとなら待ってたわよ？」
などと軽口を言ってくれるのだからありがたい。

「勘弁してくれよ」

初日からいい友達に巡りあえた。

「そうだ、ピア剣は大丈夫？壊れてない？」

フェイトとしては魔力を加減したので壊していないとは思っているのだが、それでも心配で訪ねてみた。

「ああ？ブランクムルジュなら大丈夫よ。あの後自分でキチンと確認したから問題ないって断言できるよ」

「良かった。助けてくれた人の剣を粗末にしたらバチがあたっちゃうからね」

言い得て適度に話をずらしているが、本当は魔力による損失が気になっていたので、無用な心配だったようだ。

「しかしあいつ意外と強かったぜ、フェイトが斬鉄した所は見れなかったがピアもフェイトも来てくれなかったら後10秒持たなかったな」

そういつつ右手首を少し気にしているのは少し痛めてしまったからだろうか？ゲイトには初日から悪いことをしてしまった。

「ゲイト、騎士として礼を言っよ。騎士フェイトの誇りを守りてくれた感謝をここに示す」

騎士学校にいる騎士志望の者が何を大切にしているか？それは騎士としての誇りに相違ない。

誰もが騎士として決して挫けず、心を強く持ち、信念の剣を振るうことを何よりの誇りと思っている。

それを守ってくれたのだから、騎士として一番嬉しい答えで礼をいうのは当然だ。

しっかりと腕伸ばし胸の前で敬礼する。

「照れくせえ、でも騎士ゲイト・ユン、騎士フェイトの言葉しかと胸に刻もう」

同じように腕を伸ばし、胸の前で敬礼することでゲイトも感謝に込めてくれた。

「あー男って格好つけたがるわよね……」

ピアが入学そうそう騎士の礼などの格好つけの義を見せつけられれば多少なりともげんなりするだろう。

「だってそのための騎士だもんな」

「な」

「ハア……」

悪乗りこそあったが、この感覚こそ騎士を目指すものの誉なのだから格好つけでも何でもやっておきたい。

それに、ピアだって騎士志望で入学しているのだから表面上はどう繕っていても、本心では羨ましかったに違いない。

今日は帰りに時間があつたという事で、三人は近くのカフェへと足を運び親睦を深めようということになった。

「ピアも寮なのか」

「そうよ、ここの学校の双剣部凄く強いんだから。女子の最上級生クロ先輩を筆頭に、男子のホライズン先輩、後去年1年生で今年2年生のエース、キャロル先輩と全国TOP3の騎士がいるのよ。それなら寮に入って少しでも多く技を盗みたいじゃない」

「熱心なもんだ、俺は単純な憧れできちまったからな。騎士学校の最新鋭ナイツオブラウンドってネームバリューにな」

「だからあんたみかけに反して弱いのね」

「な、なんだとお！」

話している内に思ったのが、ピアは意外とサバサバした性格で物怖じをしないため熱くなりやすいゲイトといると何かと声が大きくなる。

とはいえ険悪になるわけでもなく、ただ意見をぶつけあったり、考えが対立するだけなので特に問題はないと思う。何より見てる方は面白い。

「んで、フェイトはなんでこの学校に？」

こちらに話題がシフトしてきたようだ、特に隠す必要もないので正直に答える。

「俺は俺だけのお姫様を探すため、騎士になる必要がある。そのためにここに入学したんだよ」

と、やはり予想した反応が返ってくる、が予想はしていたので特にダメージはない。…ちよつとはあるけど。

「姫様を守るため？…まあそりゃ騎士として王道だけだよ…。でもその姫様も決まってるないんだろ？知り合う宛てとかあるのか？」

ゲイトの質問はもつともだろう。現実姫様がいる国は50国に満たないのだ、それにそもそも騎士になれたとして姫に会えるかは運にしか左右されない。

「いや、宛てとかはないから在学中に学びながら探そうかと思ってるんだが？」

とはいえ、これほどの無計画を話せばいくら気のよい友人でも呆れるため息しか返ってこなかった。

「…うん、そんな街中歩いてたら姫様がいて、偶然助けて偶然知り合えてお近づきになって、そして私だけの騎士様になって。……なんてラブコメあるわけないでしょ！」

ピアに盛大に突っ込まれてしまった。

おかしいな、自分としてはなんとなく会える気がしているのだが。やっぱり運命ってあると思うし。

「フェイト、あえて聞くがその会いたい姫ってやっぱり『グランドプリンセス・ユキ・アヴァロン』か？」

グランドプリンセス、この世界で誰もが認める至上の姫の事を指し、その美貌は男ならば敵意を持つことも許されず、女性ならば同性としてただ恥いるばかりとまで言われている。

国の行事にも積極的に関わり、いくつもの国政に発言しまとめてきた有識者でもあり、決して差別を行わず弱者の女神として常に味方してきたといわれ、良い所を枚挙するに1時間は固い。

ただ、フェイトも知ってはいるが別段彼女に会いたいとは思っていなかった。

「いや、グランドプリンススにも勿論会ってみたいけどさ、彼女の側には既に騎士王がいるだろ？多分そこに割り込むって程無謀はしないし、割り込んだら悲しませちやいそうだし」

そう、この至上の姫にはもう仕えるべき騎士がいるのだ。

騎士王アルト・アヴァロン。名前の通り既にグランドプリンススと婚姻を交わした正式な夫でもある。

騎士時代から当時の王に重宝されていたアルトは、自然ユキと親しくなりユキの心の支えとなり、彼女を裏で支え続けている。

さらに御前試合でも無敗を誇り、ドラゴン殲滅の討伐軍指揮も採ったと言われ、一人でドラゴン10匹を打ち取るという離れ業を成し遂げ、味方の危機を何度も救ったのだとか。

そして王家への忠誠は微塵の揺らぎなく誓われ続け、宝剣エクスカリバーを承継したと言われている、まさに騎士王だ。

「騎士王アルト様。憧れるわよねー、私も騎士志望だけどあの方が自分に忠誠を誓ってくれるなら私も姫になりたいわー」

あのサバサバしたピアにすらここまで言わせるとは騎士王、恐るべし。

いや、ピアが乙女に興味ないって前提で話してるから、ここまで言わせるって考えはかなり失礼なんだけどね。

「ふーん、ってなると本当に街中で探すのか？本当に宛てないのかわよ？」

ゲイトはゲイトなりに心配しているのだろう。

事実こんな事を言っていれば唯の頭の痛い人に違いない。今日会った友達だからこそ言葉を選んでくれていたのだろうが、一歩間違えればバカだろ、で一蹴されそうでもある。

「一応面識はないけど、調べた限りだったので宛てといえば宛てはあるよ」

ピアも妄想の世界から丁度帰ってきてくれたので、二人は同時にフェイトに注目する。

「まず、至高き音色の歌姫・ディーバ、氷上の舞姫・ユキ、ファツシオン界の姫・マリア、巫女姫・シキブ、それに魔法学園プリンセス・レナ、騎士学校騎士姫・アマリス。この位かな」

とここまで一息で語ってみたのだが、隣と対面にいる二人からはポカンとした表情がこぼれ落ちていた。

「…どうした？」

不審そうにフェイトが問うと二人は顔を合わせこちらに言葉を出す。
「おまえバカだろ」

結局その後フェイトが二人に抗議する形で様々な話を織り交ぜ聞かせたが、二人はさしたる興味も示してくれずしばらく後に解散となった。

二人は決してフェイトを否定した訳でも、これまでの縁だと見限った訳でもなくフェイトの節操のなさ、そして無駄に特化した情報網、そしてその中の数人は世界的に有名だったりするため、単純な高嶺の華に無謀に挑む功を焦ったバカにしかみえなかったためである。

一人自宅へ帰る道には既に夕日が射しており、少し屈んだ背に一層の哀愁を感じさせる。

「はあ、無謀だっと思って思っよな」

確かに挙げた人物の中に一人として知り合いはいない。そもそも多忙なため世界中を飛び回っている人も多く、居場所の見当すらつかない人もいる。

「でも俺にとつては夢であって、人生なんだ。…誰になんとかわれようと、絶対諦めないからな！」

そう誓いを新たに、フェイトは明日から行われる新入生レクリエー

シヨンの事を考えながら帰宅した。

レクリエーション

家に帰ると自分より小さな、でも自分と同じ新品の革靴が玄関にあった。

「ただいまー」

この時間帯で返事が返ってくるはずればただ一人。

「お帰りーお兄ちゃん、学校楽しかったの？今日帰り遅いよー」

パタパタという可愛らしい足音とエプロン姿で出迎えてくれた女の子は、妹のアイリス・セーブだ。

鶯色のショートヘアが兄妹としての共通点でもあり、実際は二卵性でもあることから目鼻立ちが似ている？位でしか似ていない。ちなみに小柄な背丈に違わず顔も幼い。

「ああ、初日から仲の良い友達が出来てな、模擬戦までやったもんだからその後話していたんだ」

よしよし、と頭を撫でてやると妹は嬉しそうに微笑む。

背は小柄な方で170cmちょいのフェイトからでも手を伸ばせば丁度頭が撫でられる高さでもあることから、自然と頭を撫でてしまう。

妹のせいだとは思うが、妹が小さい時から撫でているのが癖で自分より小さく可愛いと（猫とか犬とか子供とか）つつい手を伸ばして撫でたくなってしまうのだ。

…癖とは恐ろしい。

ただ、撫でられている途中で気づいたのか妹はこちらに質問を投げかけてくる。

「お兄ちゃん、なんでイキナリ模擬戦なんかやってるの？うちの学校そんな人一人もいなかったよ」

妹とは双子であり、フェイトは騎士学校、アイリスは魔法学校とここで初めて進路が分かれたのだ。

ちなみに理由は、「騎士みたいにバカげた体力なんかないから」だ

った。

学力はそこそこ、幸いにも魔法の才能もあつたみたいで入学試験は中の上程の成績で入学できたそうだ。

得意魔法は水魔法と炎魔法。本来逆の属性のものは苦手なはずなのだが、両方とも得意という珍しい型でもある。

強いていうならば、血液型がA B型のRh⁻、そして利き腕が両利きという所だろうか？

ただし珍しい型でもあり、実践も出来ている方だが学力が及ばなかつたため成績は中の上ということだ。

本人曰く、「理論じゃなくて、感じるの！」だそうだ。

「こつちだつてトラブルに巻き込まれたからだ、他のクラス、他のクラスメイトは断じてやっていない」

「それ自慢にならないよ…」

大人しく撫でられたままであるが、アイリスは少し呆れているようだ。

手をどけてやると、こちらを見つめまた話しかけてくる。

「今日の夕飯当番は私だからね！期待しててね！！」

ビシッ！という擬音を立てる位の勢いで指をこちらに突きつけるが、特に相手せずスルーして通り過ぎる。

「さて、コンビニ行って買ってくるよ。父さん達の方も買ってきた方がいいよな？」

「お兄ちゃん話聞いてた！？」

憤慨の意を示し、瞳が怒りと涙で染まっている。

それでもフェイトは取り合わない。

「じゃあ三人分だな。金は…げっ無い」

先ほどのカフェで結構使っていたようだ。…しかし問題だ、自分の部屋にある積立貯金を切り崩すべきか？もしもの時のために貯めてきたお金だが、今日、今この時こそその時なのかもしれない。

「はーなーしーをー聞けえー！！」

と、ここまで大声を出されては無視するわけにもいかない。やや諦めた表情で振り返ると、既に怒りよりも涙しか見えない瞳になっていた。

「ごめんごめん、意地悪してる訳じゃないんだ。世界一愛している妹を苛めるなんてことはしないよ。でも今のは苛めてるんじゃない。て事実からさりげなく遠ざかり、自身の生命の危機を回避するための…」

「だから聞いてっつてば!!」

言い訳(？)もそこそこに話を切られたので、アイリスの話を素直に聞く。

「今日は確かに当番だけど、入学式で疲れてるだろうからってお父さんがシチュー作ってくれて、タコのサラダももう出来上がってるの。だから当番っていつでも温めるだけなら大丈夫！」
そこまで聞いて、ようやくフェイトは息をつくことができた。

ここまでの流れから分かるように、妹は超絶的な料理オンチである。カーボンを作るのは当たり前、ゲル化したものや虹色に輝く料理を食卓に出された時は顔が恐怖で引きつった。

普通そこまでいけば才能が欠如していると諦めるものだが、意外な所で負けず嫌いを発揮しその結果挑戦を続けるという最悪なパターンに陥った。

既に2年、週に1回だけ当番として料理を作っているのだが、一向に上手くならない。いや、それどころかドンドン独創的になってきている。

塩化ナトリウムとクエン酸のコーラーゲン煮込みは名前こそ直訳すれば塩レモンの豚肉煮込みという平和(?)な名前だが、実際は水酸化ナトリウムと硫黄の豚足煮込みであったため、食わずに廃棄した臭いを通り越して異臭、異臭を通り越して激臭を放ち意識を保てたのが不思議な位だ。

…ちなみにどこで調味料が化学薬品に変わったのかは、追跡調査を試みても判明しなかった。

「じゃ温めるだけだし、俺がやるよ」

「なんで!? 聞いてなかったの!? 当番は私だよ!」

涙目ながらに訴えてくる妹、既にこのやり取りは何回目だろうか?
「アイリスはお皿を出して盛り付けて。それだけでいいから、というよりそれ以外やらないで」

兄の懇願について根負けしたアイリスは不承不承ながらも承諾し、

「じゃあお皿並べてるから、早く着替えてきてね」

そう言つてようやく今日の夕飯の安全は守られたのだった。

両親がまだ帰ってきていないため、二人きりでの夕食だったが共働きが珍しくない現代では特に寂しがることもなく、チャキチャキと後片付けまで済ませ部屋へと戻る。

部屋で特にやることもなくノンビリしていたが、トントン、という規則正しいノックにより静寂とだらけが散らされていく。

「お兄ちゃん? ちょっと練習に付き合ってくれない?」

魔法学校に入る時からおなじみとなっている魔法のトレーニングは、いつもフェイトが付き添っていた。

可愛い妹が事故に遭うのが怖くて付き添ったのが最初で、それ以来アイリスは一人では瞑想以外をやらなくなっていた。

もう十分に一人立ちも出来るのだが、結局はその奥にあるコミュニケーションの機会と、兄に甘えたいという心が見えているのでフェイトは付き添いを辞めることはなかった。

「分かった、先に庭に出ていてくれ」

ハイイという可愛らしい声と共に階下へ降りていく足音が伝わってくる。

フェイトは気持ちを切り替え、ジャージを羽織ると甘えたがりな妹が首を長くして待っているだろう庭へと向かった。

「今日はどうする？」

「あのね、今日は飛行魔法をやってみてみたいなって」

これにはフェイトも面を喰らってしまった。

確かに練習自体は誰もが通る道だが、それでも通常はもつと経験を積んでからである。

いくら魔法学校に入学したからとはいえそう簡単に許可は出せない。

「だめだ、お前にはまだ早い。他にも色々あるだろう、例えば炎と水の出力調整とか、土、風魔法の練習とか」

「だって魔法学校に入学したんだよ？それに実技だったら私結構自信あるもん」

いつもにはない珍しさで食い下がってくるが断じて認められない。

「だめだ、そもそもアレは実技もそうだが理論を理解していないとなおさら難しい。俺だって最初から空が飛べた訳じゃないんだぞ？空気中の元素の理解、風の機嫌、何より高い魔法出力と精密なコントロールが求められるんだ。お前には出力以外足りているとは思えん」

妹の魔法出力には目を見張るものがあるが、コントロールはまだ荒いし学力も乏しい。

飛行魔法の練習は魔法師の資格を持つ者が指導に当たるのが本来望ましい程のレベルなのだ。それは妹だって理解しているはずなのに。

「もういい！勝手にやっちゃうから！……エイツ！！」

そう掛け声を発すると共にアイリスの体が地面から浮き上がり、フェイトが手を伸ばした瞬間には加速して上昇してしまったのだ。

「アイリス！バカ！やっぱり制御できてないじゃないか！」

本来最初からあんなに加速する訳がない。それは想像力と精神の未熟さ故出力だけが先に走ったせいで加速に比重が大きく乗ってしまったっているのだろう。

「……くそっ！飛べっリアウト！！」

自分も最大加速で飛ぶが、思ったより妹の加速が早い、距離が一向に縮まらないのだ。それに焦っているせいで風のバリアも張ってい

ないため上空で体温が急激に冷え、何より急激な気圧差で体組織に影響が出てしまう。何より酸素も薄いためいつ意識を無くしてしまうか……

「アイリース!!!」

アイリスの加速が落ちてきたため上空で捉えられると確信したが、それは同時にアイリスの意識が混迷してきてしまっている証拠だろう。

「アイリス！意識はあるか！？あるならまず呼吸を整える！」

まだアイリスと距離があるため手が届かない。それまでに0.1秒でも早く苦しみから解放してやりたいため、言葉だけでもアイリスへ届ける。

…と、言葉が届いたのかアイリスの不安定だった姿勢も戻りつつあり、風のバリアも未熟ながら形成されてきている。

態勢さえ整えてバリアにより外気を遮断できれば、ひとまずは安心だ。

すぐに追いつき、妹を抱きかかえる。

そして急ぎ妹の表情を確認すると

「えへへ、お兄ちゃん私飛べたよ」

そう満面の笑顔でこちらに答えたのであった。

だが、フェイトは容赦ない拳骨を妹の頭へと躊躇なく振り下ろした。

「い……いつつたーい!!!お兄ちゃんヒドイ!!!」

なんと言われようが、妹が悪い。確かに最後自力で僅かだがコントロールできたのは褒めてもいい。

だけどその前から見ていれば命を落とす寸前でもあったのだ。むしろ拳骨で済ませたのはまだ穏便だと誇ってもいい。

「無茶ばかりだ、お前はこー一週間の魔法訓練を禁止する！」

何とか無事に妹の救出にも間に合いフェイトは地上へと高度を下ろしていく。

だが、腕の内に収まった妹からは文句が嵐のようにとんでくる。

それを全て風の鳴き声のように耳からすり抜けフェイトには届かな

かった。

「うう、ごめんなさい」

結局地上に無事戻った後もフェイトによる説教が20分程続き、アイリスの方から折れた。

「分かったか？飛行魔法はとても難しい上に俺はお前が心配なんだ。だからこそこの厳罰なんだ、ちゃんと理解したか？」

同じようなことを既に10回以上も聞けばそんな念押しが無くてもアイリスには分かる。

「ごめんなさい、お兄ちゃん。ちゃんと約束は守って一週間訓練しないから…一週間経ったらまた訓練に付き合ってくれる？」

寂しげに、そして不安が入り混じった瞳でフェイトを見上げるアイリスに、フェイトは優しく微笑みかける。

「当たり前だ。お前は俺の大切な妹なんだからお前が望むんなら多少の無茶以外は聞いてやるさ」

多少の無茶に飛行魔法が含まれない事は重々分かったので、アイリスも素直に兄に甘えなおした。

「ありがと！あと、さっき助けてくれたのもありがと」

入学式という大変有意義な1日は、家に帰ってからイベントを巻き起こしたようだがようやくその長い1日にも夜闇と共に終わりを迎えたようだった。

翌日新入生である自分達は学校へと向かっている。上級生はまだ春休みのため学校に顔を出している者は極わずかであるうが、新入生である自分達には通称洗礼と呼ばれる程のしごきが待っている。まずそこで先生方は生徒の実力を測り、個人個人に合わせたトレーニングやカウンセリングに乗ったりして実力を伸ばしていくのだ。

基礎体力が欠けているようであれば、素振りの時間等大幅に減らされひたすら走り込みをやらされたり反射神経が劣るならば近距離ノックを受けたり等理に適ったトレーニングが選択されるが、稀にどれが平均的であったり全てが突出しているようだとそれは教師陣から注目の的となる。

将来的にどれだけの大輪を咲かせられるかが教師に問われるからだ。平均的であればどれもが伸びる可能性があるのでこれからの成長幅次第で優秀な騎士を排出することも、そして突出した天才や秀才がいるならばその才能と努力を殺さずに伸ばさなくてはならない。

これこそが教師の質が問われる物で、この洗礼と呼ばれるデータ測定用の全データは教師陣ならば誰でも閲覧できるし、その成長が悪いようならば教師人生が最悪絶たれてしまうことだってある。

だからこそこの後者の部類に属してしまうと、普段鍛錬の質が厳しくなりがちである。もっとも厳しくして辞めたとなつた場合は教師の責任ではないという暗黙のルールが占めているので、スパルタの温床になりやすい。

話を戻すと、フェイトは魔法こそ使え剣技も抜群だが他の体術や体力、敏捷性に反射神経に動体視力等は平均的である。

目立ちたくないのに剣技をやや控えめにしていた所この洗礼による計測データは平均値に近い値を示してしまったのだ。

例えではなく丸1日ばかりで計測というなのしごきを受けた1年生全員は、明日の登校を拒否したがるものが全体の9割を占めていると言つてもいい。

何故なら教室に置いてある荷物を取りに行こうと考えても体が動かないのだ、疲労過多で。それもクラス全員というより今いる1年生ほぼ全員が校庭で倒れたまま動けなかった。

かろうじて側にいたゲイトにフェイトが話しかけてみる。

「なあ、これ知ってたか？……洗礼」

ゲイトは体力には自信があるらしく全体から数えても優秀な位の人

数の割合で倒れてはいない。だが、そんな彼でも立つことは出来なかつたようだ。座つたまま目を虚空にさまよわせて答える。

「……ああ、噂でな。初日の洗礼が終わつて家もしくは寮に帰れた人物は学年で1人いればいい方だつてな。そして立つことが出来た生徒もそりやすばらしい努力か才能を持っているとか」

ゲイトとしては悔しい所だろう。体力に自信があつたため最低でも立っていたい、そう思っているハズだが足は石のように固く、例え今この場でナイフを振り下ろされようと決して回避できない位精神力を振り絞つても無理だつた。

「足に50kgの重しを片方ずつ、計100kg。それで砂丘ゾーンの制覇が第一課題。その後と同じ条件で水泳を10km。それが準備運動だっけか？」

思い出すだけでも恐怖で意識が遠のきそうだ。何せ小型だがサラマNDERが後ろから追っかけてきたり、獰猛なホオジロザメが解き放たれる等下手したら命にかかわる所業である。

現に今日で病院送りになつたものが100人は超えたはずだ。他には騎士を廃業せざるを得ない怪我を負つた者も数名でたとか。

教師もフォローに入るが(当然だろう)カバーしきれずやむを得ない状況で後ろから追いつかれ、食われたり焼かれたり。

もつともそういう危険を本当に解き放つたからこそ、走破しなくては自分がそちら側になつたかもしれないのだ。

だからこそ本当はフォローが間に合つたのかもしれないが、わざと犠牲者を出した、とも考えられる。

勿論推測だが、そういつた下の下を切り捨てても上を目指さなければならぬのが騎士でもあるからだ。

みんな仲良くゴールは出来ない、持つて生まれた才能と環境、そして決意をした時からのたゆまざる努力こそ今日のこの準備運動の結果であろう。

「んで、準備運動が終わつたら闘魂注入だっけ」

教師によるストレートパンチである。避けれるならば良ければよし。避けられないノロマはそれこそ喝をいただけるのである。

……ちなみにこれもきちんとした計測の一部に含まれているのである。

「次は植物モンスター園か」

もうそろそろ思い出したくなくなってきた。

恐らく数百体はいるであろう食人植物の中からターゲットの植物モンスターを見つけ、ペイントしてくるのである。

鬼門だ、何が難しいかと言えば回りがモンスターだらけ、それも同種族だから見分けがつきにくいから判断力と集中力、それに記憶力や仲間との連携等が試される。

「次はアースクエイクか」

端的に言えば力試し、だが基準値に満たないものは何度でもやり直させられるので地獄だ。最初に決めないと体力を使うし力も落ちてくる。

ただし何でもありなので屋上からダイブして力を底上げしたバカもいたらしい。

これだけの苦行でもまだ午前中だから驚きだ。

ゲイト、ピア共に午前中のうちは言葉少なになりながらも一緒に回る元気もあつたが、午後からは既に亡者だかゾンビだか分からないような状態で這いまわらされた。

ピアともゲイトともその内にはぐれて、今終わって教師陣に放り出された所偶然ゲイトが傍にいたのだ。

「……とりあえずお疲れ、よく生き残ったなお互い」

「……ああ、ピアも最後の方に1回見かけたから多分今この校庭のどっかにはいると思うが」

首を動かして辺りを伺うゲイトだが、ピアらしき人影は見当たらなかったようだ。

「俺もう寝るわ」

そついい残しフェイトは眠りに落ちた。

気絶に近かったのかもしれないが、ここが校庭でシート一枚ないことも地面が砂地であるうと構わなかった。とにかく疲れた、その一言に尽きる。

「そつだな、俺も……起き上がれねーし、寝るわ。おやすみよ」
仲のよい2人はそつ言い残して、深い深い眠りについた。

「これは驚いた」

そつ言つた教師の1人が見ているデータはとある1年生のものだ。

「ほうほう、自力で歩いて寮にまで帰れたのか、いや大したものだ。前年も前々年も出なつたのだが」

こちらの少ししわがれた声の教師はいつになく面白いものを見つけたように、ひょうきんな声でこたえる。

「ああ、何故私のクラスじゃないのかしら。私とならきつと息がピツタリでしょうに」

妖しく唇を舌で舐める女性教師に、少し震えながらも男性教師が答える。

「い、いえ、規則ですのでどうか落ち着いて」

そんな気弱な男性教師を横目に、黒衣の教師が言を発す。

「俺のクラスとは運がいい。……飛び級させてやるさ」

妖しさを超えた闇に近いような声音はその場にいた教師陣の1人を除いて、戦慄におののかせていた。

「分かつちやいなえな、本当の有望株は……」

筋肉質の男性教師は今年1番の成績の生徒には全く興味を介さず、ある1人の生徒だけを見つめていた。

「フェイト・セーブ、お前は何物だ？」

騎士学校

翌日校庭で目を覚ましたフェイトは鉛のように重い身体を何とか起こしてみた。

「う……ってえ。足も腕も全身が力チコチだよ」

うっかり伸びをしようものなら筋肉がみしみしと嫌な音を立て、体中を激痛が走る。

「なんとか、立てそうか、な。よっと」

まだ全身が悲鳴を上げそうだが昨日の立つことすらできない状態に比べれば随分まともになったとも言える。

まだ空は白み始めたばかりだが、回りも朝練を欠かさない人達が多かったらしく目を覚ましている人物は思ったより多い。

とはいえ、誰もが立つのがやっとで少しばかりは歩けるのだろうか素振りを出来る元気が残っているものはいないようだ。

と、隣を見るとゲイトも目を覚ましたようだ。

「ん……もう朝か。ふわぁ〜まだ眠いし痛いぜ」

自分と同じようにまだ寝ぼけていそうな友人に声をかける。

「おはよう、俺より少しだけ寝坊だな」

気安い笑いだだが特に気にする風でもなく、よお、と手を上げて応えるゲイト。

「体はつと、うん動くな。朝練は無理そうだが」

そう言っただけ立ちあがるゲイトはフェイトよりも幾分余裕がありそうだ。

「んー！つとさてどうするか？まだ学校が始まるまで時間があるけど？」

体を伸ばしながらこちらに目をやるゲイト。訂正、こいつやっぱり体力あるわ。

「俺はとりあえず教室に戻るかな。教室までいけば替えの服もあるし空調も効いてるだろうし」

「だな、なら行くか。フェイト歩けるか？」

ゲイトの言にフェイトは不遜な態度で応える。

「余裕だよ、行くか。……っとどうせならピアも見つけて行くこうぜ」
一歩程先を進んでいたゲイトも思い当たったかのようにこちらに振り向いた。

「そうだな、あいつも回収していいこうぜ」

そして広い校庭を二手に分かれて探しているとゲイトの方がピアを見つけた。

ピアはまだ体力が戻っていないらしく、これだけ回りが起き始めているのに眠ったままだ。

「ったくよ、やっぱ女子にはキツイだろうによく耐えたもんだ。やっぱすげえんだなお前」

全体の3割程が女子だが、女子だからと言って洗礼が軽くなるわけではないのだ。

成長期であれば体力に差はつき始める頃なので、まだ男子の上位に混じれる女子も少なくはない。

とはいえそれは一般的な話なので、同じ騎士を目指している者達の中で女子はやはり体力的に劣っているものが多い。

それなのにこの友人は一丁前に昨日のしごきに堪え切ってみせたのだ。

まだ体力が回復しきっていないこの状態をみれば、昨日は本当に最後の最後まで強い精神力で乗り越えたのだろう。

「無茶しやがって」

少しまだ体に負担がかかるが、よく眠っているピアをゲイトは起こさないよう背負い、フェイトに合流するため歩き始めた。

「お、ピア見つけたんだ。……で、ゲイトおぶってきたと」

これは女子をおぶった状況が羨ましいとかではなく、女子とはいえ一人を背に担いで歩いてこれた基礎体力と体力回復速度に心底驚い

ただけだ。

「ああ、ピアも教室に連れて行ってやるうぜ」

「……いいけど、悪いが俺交代は出来なさそう」

既に自分が歩くだけで精一杯のフェイトはそれだけ口にして、ゲイト、ピアと共に教室に向かった。

「お、一番乗りー」

明るい声ではしゃぎつつもフェイト達は教室に着いた。

「よつと、この辺りに下ろしてやるか。フェイトなんか敷くものとかないか？」

そう尋ねられたフェイトはバスタオルを自分のカバンから取り出し床に敷き、ゲイトはその上にピアを下ろした。

「用意がいいな」

からかい混じりにゲイトが問うと、

「シャワーを浴びるためだよ。もっともそんな余裕はなかったが」
これだけ歩いてきてもピアはまだ目を覚ましておらず、余程疲れているのだとみえる。

「んーじゃあ俺らもシャワーでも浴びに行くか？」

「おい、俺今タオル無いつての。それにどっちにしても今お湯なんか当てたら筋肉が悲鳴上げそう」

みっともないが正論でゲイトをかわし、

「なら俺シャワー浴びてくるわ。ピアをよろしくな」

そういつて元気な友人は自分のカバンを持ちシャワー室へと行ってしまった。

「全くあいつときたら。……でもピアもよく頑張ったよな」

そつとピアに優しい視線を落とす。意志の強そうな紅蓮の瞳も目を閉じていれば、スヤスヤと眠る同世代の女の子でしかない。

それに眩しいばかりの金の髪、同世代の女の子としては発育してい

る胸周り……とここまで考えた瞬間思考を振り払った。

「いかん、何を考えているんだ。ピアは友達……」

「それが友達？友達っていうよりは足手まといじゃなくて？」

ふと後ろの方から声がかかりフェイトは慌てて振り向いた。

教室の入り口に立つピアと同じ眩いばかりの金の髪、そして紅蓮を想わせる意志の強い瞳。何より背格好こそ違うが良く見ればピアと同じように整った顔立ちや鼻立ちまでそっくりだ。唯一違うとしたら、腰まで届く流れるような髪の長さ、それに似合うようスレンダーだが痩せすぎと見えない凛々しい体格、そして何より胸周りの残念さだけだろう。

「あなた達が今日初めて校舎入りした1年生よ、だからほんのちょっとだけ興味を持って追いかけてきたけど、期待はずれね」

初対面から随分な言われようにフェイトもむっつとしてしまう。目の前の女性は騎士剣を腰から提げ自分が間違ったことを言っていないと確実に思っているような人物だ。

「あいにくあなたがピアの肉親だろうと、他人だろうと俺とあなたには全く関係がない。用が無いなら放っておいてくれないか？」

第一印象は間違いなく最悪なハズだ、入学から3日だというのにトランプルに巻き込まれるのはこれで2度目か。……そう思っていたら、

「ああ、ごめんごめん、自己紹介しましうか。私はレイ・ハルト、お察しの通りピアの双子の姉よ。武器は見ての通り騎士剣、よろしくね」

名乗られたからには名乗らねば騎士ではあるまじき不遜になってしまふ。フェイトも尋常に名乗りをあげる。

「俺はフェイト・セーブ。ピアの友達であなたと同じ1年生だ。武器は今手元に無いが剣を使っている」

普通ならここで武器なしという愚行や暴挙に目を丸くでもしそうだが、レイは特に何も反応を示さずにこちらに握手を求めてきた。

「よろしく、妹からあんたの事聞いてるわ。斬鉄をぶちかました非常識な剣士として、ね」

あ、納得した。ピアが事前に話していたからこそ剣が無いと知っていたし驚きもなかったのだ。

だが、逆に疑問に思うのは何故ピアからそんな話を受けるほど信頼されている姉が、妹を足でまといと蔑むのか？

「あんたにはまだ話す時じゃないと思うから何も言わないけど……少なくとも1つだけ言えるわ。あんた妹とは関わらない方がいい、この子じゃ有事の際本当に足手まといになるから」

結局握手が交わされることはなく、レイは教室から出て行ってしまった。

……一体なんなんだ？確かにピアとは会ってまだ3日目だし家庭の奥深くまで聞いているわけではない。

でもあのレイという女子はあからさまにピアにだけ侮蔑をぶつけている。よくない話だ、姉妹で争うなんて。

フェイトはピアの側にしゃがみこみ、そつと髪を撫でる。

「ピアは友達だよ。……でもお姉さんとも仲直りできるといいな」

そうこうしているうちに教室には人が増えてきた。ゲイトも丁度いいタイミングで戻ってきたが、まだピアは目を覚ましていない。

すでに時刻は9時の10分前だ。後10分したら教師が来てしまう。

「しょうがない、起こすか。出ないと身だしなみを整える時間もないだろうし」

ゲイトがここまで女子に気遣えるという長所を持っていたことに驚いた。ゲイトの見た目からいって女子に気遣えるような性格に見えない（失礼）ので大変驚いた。

そういえばきちんとおぶってきたのも彼だし、もしかしたら自分より女子に手慣れているのかもしれない。

「んじゃ起こそうか、ピア起きろ〜」

耳元で声を出してみるがう〜んと、口からくぐもった声が少し聞こえただけで起きる気配はない。

「ピア起きろ、朝だぞ」

ゲイトも隣から声を出してみるがそれでもピアは起きる気配がなく、それどころか

「あ……あ、う〜ん」

などと寝言を言ってくるので少しドキドキしてしまった。これではまるでこちら側が悪いことをしているようだ。

「仕方ない」

そう決意すると、フェイトは最終作戦とでもいうべき強硬策に打って出た。

「起きろ〜！えいつ〜！！」

そしてピアの鼻を摘んだ。妹のアイリスが起きない時等によくこうやったものだが、友達とはいえ女の子に、それも人前でやるにはいささか常識がかけていたらしい。

それはピアが教えてくれた。

「……………うーうーうー！ぷはっ！！」

息が出来なくなりついに起きた。ピアが周りを確認し、ここが教室で俺とゲイトが寝顔をずっと見ていて、しまいにはフェイトが自分の鼻を摘んだということまで意識が回り。

「バカアー！！」

右頬に鉄拳を打ちこまれたのだった。

「もう、起こすなら普通に起こしてよ」

まだ怒っているピアをゲイトがなんとかだめてくれつつ、フェイトがひたすらに謝っていた。

ちなみにクラス的女子からも男子からも集中砲火を喰らっていた。

「あれはないな」「サイッター」「妹とクラス的女子の区別も付か

ないの?!」などだ。

「フェイトも悪かったって言うてるし、それに最初は普通に声かけたりゆすったりして起こそうとしたんだ。それに時間が時間だし急いでいたっていうのを汲んでやってくれ」

ゲイトがピアに献身的なフォロワーを重ねてくれたため、ピアの怒りも大分収まってきているようだが、ゆすったりはしてないんだけどな。いや、ホントみかけによらず頭の回転と口が達者だったぜ。

「ま、いいや。運んでくれたのも2人でしょ？熟睡してた私も悪いしおあいこつてことにしときましょ、ありがとゲイト、とフェイト」おっとまだ棘が抜けきっていない。もう1回謝っておくことにした。そして席について間もなく教師であるギルバードが教室にきた。

「さて、ではHRを始める、うちのクラスから脱落者は3人だ、1人は退学届を出すだろうが、もう2人は病院での治療後に復帰する予定だ。とはいえいつ退学するか分からんがな」

教師が口に出す言葉はクラスを黙らせるには十分だった。入学3日目で脱落者1人、そして2人もおそらくは退学になると告げてきたのだ。これに動揺を隠せないのは当然だと思う。

「今年は前年、前々年でなかった帰宅者が1人出た、他クラスだが発表しておくとな前はレイ・ハルト。騎士剣使いの正統派騎士候補だ。皆も見習うように」

クラスが今まで以上の緊迫感に包まれた。自分達はこの洗礼を苦難を乗り越え仲間達との話題にするレクリエーションの一部だとして考えていなかたのだ。

だが、現実にはそれを踏破し、騎士として自分達よりも確実に1つ頭が抜けている存在はプレッシャーの他ならなかった。

「あの自信……偽りじゃないって所か」
確かに双子で一方は帰宅者、一方はつい先ほどまで眠っていたのだ。明らかな差がついている。

ピアの実力も高い方だとは思うがやはり女子だとも思えるものが残る。だが、レイならば恐らく同学年では誰も寄せ付けず上級生にも

混じって訓練に参加出来る位実力があるのだろう。

「さて、では授業を始める。まずは校庭で腕立て腹筋背筋を300回ずつ、そして各々の武器の素振りを1000回。これを午後までにやること。出来なかつたものは居残りだ」

冗談、ではないようだ。あれほどのしごきの後でも訓練を欠かさないとは。

騎士というものの高みの一端を知る思いだ。今年入学者がおよそで800人、そして現在の最上級である5年生はわずかに40人。同じようにこの洗礼を乗り越えた2年生ですら110人。恐ろしい倍率だ……

これはふるい落としなのだ、今日これで居残り成し遂げたとしても明日も待ってはくれない。ひたすらに高みだけを目指し崖を昇っていくようだ。

立ち止まることは許されない、俺達は子供でありながらも子供ではない尋常な選択を選んでいかななくてはならない。

「さあ、準備ができたものから校庭に出る。別に職員室でも構わんぞ？」

不敵な笑みだけを残し教室から去っていったギルバード。発破をかけたつもりか。

ならやってやるよ、少なくともこいつらは俺と同じクラスなんだ。見捨てて騎士になりたい訳じゃない。出来るなら俺の周り関わった奴は夢を叶えるなり、幸せになるなりして欲しい。

……だから俺がやってやる。そう決意して俺はギルバードに代わり教壇に立った

「みんなー元気かー？元気なわけないよな、俺も骨がみしみし言ってきたついし正直寝不足だし」

クラス中が不思議そうな顔でこちらを見てくるが、それでいい。

「注目！俺達は騎士になるためにここに來てるんだ！みんな努力も決意もしてきてたと思う、ならさっきの脅かされただけで不安になるな！俺達は既に覚悟をしてきているんだ！！」

「まだだ、まだ皆の心は不安のまま、焦燥に駆られたままだ。もっと引き込まなきゃ！」

「それでは発表します、この後校庭は他クラスも出て行つて場所取り合戦が始まつちまう！そうしたら時間を浪費して昼飯が食べない！！みんな朝飯だつて食べてないだろ？なら昼飯は、『全員で』、食べようぜ！！」

皆が俺に目を向けてくれた。……ははっ、みんな不安だっただけじゃん。

「そうと決まれば早速校庭に行くぞー！ノンビリしてたら他のクラスだつて昼飯食べないことに気づくからな、善は急げ！！」

そして俺は教室を出ようとする。

すると背後からは席を立つ音や、肩を叩く奴ら、それに俺の直ぐ後ろにはゲイトとピアが来てくれていた。

「行くか！飯は大事だもんな」

「私さっきのHRでお腹なりそうだったのよ」

そんな俺の冗談に付き合ってくれる最高の友達がいた。

町

あれから数日、妹の方は洗礼という荒行事もなくつつがなく授業をこなしているようだった。

学校に泊まり込んだ夜は、教師から親に連絡が行っていたようで普通にお帰りといわれてしまった。

もっともその後どんな事があったのかという武勇伝はご飯の間には語りつくせない位多かったため、アイリスには食事後も色々話してやった。

他にも洗礼後の午前中の訓練は、うちのクラス1 - Gは全員やり遂げ全員で昼飯を食べた。

もっともナイト・ファブレ御一行とは会話もしていないので、クラス一丸と言っているのか疑問は残るが。

しかし、他のクラスは朝になっても疲労がとれずそれなのに訓練をさせられることを不満に思い、退学した生徒も決して少なくないとか。

……良かった、うちのクラス、目の前にいる奴だけでも救えて。

ちなみに、最優秀だったレイ・ハルトは誰より早く訓練を終えた上に自主訓練までこなしたそうだ。

もはや人間のなせる技ではないと語り草だ。

そして筋肉痛も治ってきて、訓練は個別プログラムに移行した。

ピアはその技術に瞠るものがあるが、筋力、体力に難ありとされそちらをメインにトレーニングが組まれている。

逆にゲイトは有り余る体力は長所だが、戦闘訓練によつての技術習得や、ランスを扱う際必要となる体裁きなどがトレーニングだ。

一方の俺は

「なんで最優秀のレイ・ハルトさんと同じメニューなんですかね？」
「私の方こそ聞きたい。フェイトはデータ上平均値グループだろう？」

そう、レイとは魔法抜きでぶつかれば恐らく負ける程強い。それはデータ上もそうだし、自分でもそう思っている。

だからこそおかしなのだ。自分は平均グループに属するはずが、天才型グループに入れられているのだ。

そしてこの教師同士がもはや目も当てられない程相性が悪い。

筋肉ガツチリのいかにもギルド上りの教師ギルバードが俺を天才型グループに推薦しねじ込んできたのだ。

それを闇騎士と現役時代に呼ばれたまま引退した教師がレイを受け持っているのだからとにかく相性が悪い。

闇騎士とは堕ちた騎士ではなく、騎士であるのに国のため国の暗部へと対峙した尊き騎士の称号だ。

普通騎士にまでなれて暗部を受け持つものは殆どいない。皆晴れやかな舞台を望み、光を望む。

だが、誰かがやらねばならない事を理解し、日の光よりも国を大事に思い、守ってきた騎士は偉大だ。

だからこそ闇騎士とは揶揄ではなく、れっきとした称号なのだ。

引退の際だけに授けられる王からの全ての感謝の念、人生でただの一度だけ日の光を浴びれる瞬間。闇騎士として責務を全うした者が全ての責務から解き放たれ、ようやく騎士と名乗れる儂い希望の光。

とは言っても目の前の闇騎士は暗部にいるうちに少しだけ、いやかなり性格がねじ曲がってしまったのだろう。

過程には微塵も興味がないらしく、訓練メニューに休憩は本当に最低限だ。

一方ギルバードは熱血、以外にもメニューはスパルタだがまだ常識の範囲内で訓練メニューのすり合わせが本当に目も当てられない。

幸い、レイは常識人だし俺にも気を使ってくれる等友人として付き

合いたい程いい奴だったので、目下の悩みはこの教師陣の対立である。

「ハア、本当はギルバード教官のメニューじゃぬるいんだが、それならフェイトと話せる機会が増えるからな」

レイが気にしているのはピアだけであり、個別メニューに入ってからピアともゲイトともロクに会えない日が続くとしてレイは本来の性格であろう優しく面倒見のよい姉の顔を見せるようになっていた。

とはいえ、同い年でもあるし、家に帰れば手にかかる妹がいる兄として言わせてもらえば姉として振舞われても戸惑ってしまう。

こちら一番上として育ってきたので接し方の距離感が掴みにくいのだ。それはレイも理解しているようで、無理に追いかけてはこない。

ちなみに呼び方はお互い名前前で呼ぼう、とレイから提案されたものだ。

「いい奴なんだけどな」

大岩相手に連撃を繰り返しながらフェイトはぼんやり呟いた。

そして夕方、ようやく1日の訓練から解放された時レイから声をかけられた。

「フェイト、この後時間あるか？」

一緒に訓練してから初めての放課後のお誘いだった。

「あるけどどうしたの？レイ？」

別段男女として意識することはあまりないが、放課後の誘われたのであれば男女として意識してしまうのは困ったものだ。

「実は町に出てみたくな。寮ばかりでは毎日が味気ない、それにフェイトはこの辺り詳しいんだろう？」

実際町に出たことは数える程だが、女の子にここまで言われては詳しくないとは言えない。

「任せとけ！」

そう見栄を張ってしまう。……だって男の子なんだもん。

「じゃあシャワーを浴びたら校門で待ち合わせよう、手早く15分位で集まってくれると嬉しい」

そう言い残しレイはさっさとトレーニングルームから出て行ってしまふ。

「15分って……移動時間とか含めたらメツチャ急がなきゃじゃん」とはいえ、女の子を待たせる訳にもいかないので、フェイトも駆け足でトレーニングルームを後にした。

「お待たせ！」

校門について1〜2分もしたらレイが走ってこちらにやってきた。

あ、シャンプーのいい香りがする。レイはピアと違って凛々しい感じがするし、今まで女の子らしさを感じたことが無かったからこれはドキドキしてしまう。

「ごめん、待った？」

うわっ、反則だろ！？こんなの言われたら意識してなくてもデートとか思っちゃうじゃん！

こっ、急に無防備な顔を見せるのは反則だー！

「いや、俺も今来たところ。んじゃレイ行こっか」

何自然と振舞ってんの！？決して慣れてるわけじゃなく、むしろデートとか人生初だし。

ってかこれデートじゃないし……

と多少混乱しているとレイがクスクスとこちらに笑いかけてきた。

「大丈夫、そんな緊張しなくても。フェイトデートとか初めて？なら私がリードしてあげるから」

そうとびっきりの笑顔で迫られるとクラクラしてくる。うわっ本当に同い年?!レイ可愛い。。

と思っていたと、レイの耳が赤い気がする。いくら夕方とはいえこの色合いは違うと思うし、なら、

「レイ？レイこそ初デートじゃないの？緊張してない？」

そう切り返してみると、とびっきりの笑顔から一転、非常に驚いた顔に早変わりした。

「……なんでバレちゃったかなあ、ちよつと最初の言葉からわざとらしくすぎた？」

どうやら最初の方は計画通りだったようだ。……意外と策士だな。でもなんで？

「違うよ、耳。赤くなってる。結構無理してたんじゃない？」

そう言われレイは自分の耳に手を付け覆い隠すようにしている。

「見ちゃダメー！全く、ちよつとからかってみよつと思つたのにとんだカウンターだったわ」

今度はそつぽを向いている。ちよつとわざとらしい感が残っているのはきつと何かの本を読んで覚えた仕草だからだろう。

変な所まで勉強家のレイの意外な一面が見れた事が、少し可笑しかったし嬉しかった。

「あんまバカやってないで行こう、日が暮れちゃうって」

学校から歩くこと15分、繁華街と呼べる場所までやってきた俺達。道中くだらない話ばかりしていたが、意外にも退屈も話題が途切れることもなく話が続いていたのはひとえにレイのおかげだろう。

話題を振ればドンドン話を膨らませてくれるし、逆に話の途切れ目にはちゃんと次の話題を用意してくれたりと本当に上手だ。

だが、道中町についたら何をするか？という事は2人とも会話に出さなかつた。

それは暗黙の了解だったのか分からないが、レイは実際に町を見てから見て回りたいもの、やりたいことを決めるつもりだと感じていたからだ。

さて、町についた俺達が向かった先は――

「見てみて！この装飾のついた剣、綺麗！」

武器屋だった。いや、別に色のある話を期待してたわけじゃないんだけどね。

レイも勿論愛剣と呼べる剣は持っているが、それでも魅かれる剣があれば欲しいと考えてしまうのが剣士の性でもあろう。

実際自分もそう乗り気ではなかったが、レイと一緒に見て回るうちに好みの剣を見つけていたのだから見事に同類であろう。

「そういえばフェイト自分の剣まだ持ってきてないよね？代替品でもいいから持ち歩きなよ、騎士としていざというとき困らない？」

もしかしたら、これが今日の目的なのかもしれない、と思いつつも既に気分が乗り気であるため悪い気はしない。

レイとしても折角一緒のクラスになったのだから、フェイトにも騎士らしくして欲しいのだろう。

「んじゃ俺これにするわ、えーつとこういう時のためのカードつと両親から一応預かっているキャッシュカードだが、実際に使ったのは今日が初めてだ。」

裕福な方ではないが、元来物を欲しがらない性格と両親の物づくりの好きさから完成品を買うことは少ない。

実際家も父親が立てたというから驚きだ。ちなみに職業は科学者である、決して大工ではない。

そんなわけで初めてのカードでの買い物に少しドキドキしながらも買い物を済ませると、意外にもレイも武器を買っていた。

「あれ？それってダガー？」

そう、店内あれだけ剣を見てはしゃぎまわっていたにも関わらず買ったのは剣ではなくダガーだった。

「そうよ、騎士とはいえ剣一本で戦場には立てないからいつか買お

うと思っていたの。思ったよりいい買い物が出来たわ。 - - フェイトは騎士剣？」

ちなみに俺は『ホークル』という騎士剣を買った。

使っている鉄鉱石が魔力を貯蔵するタイプだったので買ったのだが、実際の強度や切れ味等は他の騎士剣に劣るため結構安く買えた。

「ああ、デザインと重さでこれに決めた」

本当の理由を話せば好奇の視線は避けられないため、無難な答えでレイを撒く。

「ま、好みならいいけど。さてじゃあこの後は遊ぶ？それともお茶でもする？」

今日についているかもしれない。レイは連れて歩くには勿体ないほどの美少女なのだ。ちょっと胸周りが……とはいえ他はパーフェクトに近い美少女とデートみたいなものが出る俺は今日限りなくついている！

そう思いながらレイの選択に迷っていると、ふと視界に入る見知ったような少女。

あの金の髪、それに制服は……

「あつ！」

思いだした瞬間走りだしていた。

「えっ？なによ、フェイトどうしたの」

レイもフェイトの後を追うが、フェイトがどこに向かっているのかわからない以上フェイトについていくしかなかった。

「おい、リード」

フェイトに呼びかけられ振り向く金のロングヘアの少女。

「こんにちは、フェイト。今日は普通に走ってくるんだね」

と、いきなりこちらを牽制するのだから困ったものだ。おそらくこの少女なりのコミュニケーションなのだろうが、誰かに聞かれてもしたら困るようなことを引き合いにだすのは止めて欲しい。

「ああ、ってリードは相変わらず猫と遊んでる最中か」

言われた通りリードは通りの脇で黒猫と遊ぶようにしゃがみこんでいるため、非常に目立っていた。

「フェイト？その子知り合い？」

レイが追いついてきてこちらに問いかけと回答を促す。

「ああ、入学式の時たまたま知り合っただ。紹介するよ、こちら魔法学校多分制服的に『エンシエントスペル』の1年生リード・ロード。逆にこっちが俺と同じ騎士学校の同じく1年、レイ・ハルトだ。2人とも仲良くな」

「初めまして、フェイトから紹介された通り1年生のレイ・ハルトよ。あなたはリードさんでいいのね？」

「うん、リードでいいよ。その代わり私もレイって呼んでいい？」

「勿論」

「よろしく」

さすが、女子同士はコミュニケーションが早いな。

リードって人見知りな感じがするけど、案外そんなことないのかな？

「ところでリードは何してるの？」

そう聞かれリードはちよつと考えた後、こう答えてきた。

「猫語の解読。猫の言葉が分かる魔法が欲しくて」

その答えを聞いて俺達は絶句するしかなかった。

動物だろうがモンスターだろうが竜だろうが、人語を解せないもの達との意志疎通は何年も連れ添ってそれで何となく分かる、と言った程度のハズだ。

それなのに、猫限定とはいえ猫の言葉が魔法で分かるようになるならば……天才的発見となる。

それをきっかけに他の動物やモンスターの研究に及ぶことは容易く理解できるし、何より需要がすごいだろう。

とはいえ、魔法学校の1年生がそんなことをやり遂げてしまったならば、世界中の研究者の9割は裸足で逃げて謝らなくてはならない事態になるだろう。

「今はまだ4割位しか完成してないけど、2年以内には完成させたいし」

……やばい、本気だ。っていつか天才だったのか。というか飛び級してもおかしくないぞ。

レイがこちらを肘でつついてくる。説明を求めているようだが、むしろ俺が知りたい。

レイという騎士の天才少女に、リードという魔法師の天才少女、なんとという人との縁だ。

これはもう一生分の縁の力を使ったと言っても過言じゃない気がしてきた。

「な、なありード？お前って1年生だよな？なんで1年生なんだ？」至極当然の疑問だが、口から突いて出てしまった。

するとリードは不思議そうに首を傾けながら答える。

「1年生だからでしょ？同い年じゃないの？」

……負けた、本当に負けた。これが天才ってやつか、恐るべき！

「……まあいいじゃない、もし良かったらこの後時間ある？一緒におしゃべりとか遊んだりとか……」

ドゴオン！！！！

そんな平和なやり取りは近くから聞こえた爆音によって、一瞬でかき消されてしまった。

俺達も、通りの人達もこの平和な町で何が起きたのか理解するのに数秒以上かかってしまった。

だが、それが間違いだった。

ドオン！！

更に続く爆撃、考えたくない最悪な予感が頭を横切る。

レイもその可能性に気付いたのか、こちらに不安が隠せていない瞳で訴えかけている。

「テロ？」

そして嫌な想像は現実となってしまった。

ガン！ガン！パラパラララ……銃声が響き、そして

「きゃあ！」「うわあああ！」「がつ！た、助けてくれ！！」

町は突然の侵攻によりパニックに陥った。

パーティー

「どうする?! すぐに避難しなきゃ - -」

レイもさすがに焦っているが、俺はそう思わない。

「違う、俺達は一体どこの学校に通っていると思っっているんだ? 騎士学校だ、俺達こそ町の人達の避難にあたらなきゃならない騎士なんだ。逃げちゃダメだ!」

フェイトの強い意志と、冷静な状況判断にレイも落ち着きを幾分取り戻したのか、素直に頷く。

「じゃあ私達は分かれて避難にあたりましょう。私とリードは一緒にこっちの道に行くわ」

リードは魔法師とはいえ、パートナーがいなくては魔法の価値が十分に発揮できない。

それに戦いに不慣れだった場合でも、結局は避難させなくてはならない対象だ。レイはそれを引き受けてくれた。

「なら俺は騒ぎの中心に行くか、リードを頼んだぞ」

フェイトはそう言い残し、銃声が鳴り響く通りの方へ全速力で駆けだしていた。

「ちよつと!?! いくらなんでも無茶よ! 私達はまだ騎士じゃない -

」

「大丈夫」

フェイトを引き留めようとするレイを止めたのは、意外にもリードだった。

「大丈夫って……騎士が強いのは地獄の鍛錬を超えた者だけよ? でなければそもそも銃を持った相手に勝てるかどうかだって - -」

「大丈夫、フェイトはきつと大丈夫だから」

妙にフェイトを信頼しているのが気になるが、もうフェイトは人ごみに紛れてしまい追おうにも追えなくなっていた。

出逢って僅かの同い年の少女だが、こんな所で死なせるわけにはい

かない。

「行きましよう、私から離れちゃだめよ？あなた戦闘の経験は？」

「攻撃魔法は苦手……」

「分かったわ、なら絶対に離れないで。それと町の人達を避難させている最中敵と出逢ったら私は殿として止める覚悟で臨むから、その場合は町の人と一緒に逃げて」

「……」

「いいわね、約束よ。さ、急ぐわよ」

そうして2人は町の人達の避難へとあたるため、フェイトとは別の方向へ駆けだした。

「くっ、まだこんなに人が……」

銃声が聞こえた方を目指しているが、そちらから避難してくる人物の方が圧倒的に多くともではないが中心地に辿り着けない。

「緊急事態だ、リアアウト！」

騎士学校の制服のまま飛行魔法等で搜索対象にでもされそうだが、人命には替えられない。そのまま人ごみを飛び越して進む。

「見つけた！」

裏通りからライフルを携えた男達が4、5、6、……いや、10人は超えているだろう。

「幸い空に気は配っていないな、なら！」

フェイトの右の掌に炎熱を込めた熱球が形成される。

「建物ごと埋めて進路を断つ！エクスプロード！」

ゴウツ！と勢いをつけ熱球を建物目掛けて投げつける。そして爆音と共に通り建物の瓦礫で埋め男達の進路を断ち後続が合流し辛くなる。

「なんだ！いや、あそこだ！上だ！！上にいるぞ！！」

さすがに一撃で存在はバテてしまうが、十分だ。後続が後何人いたのかは知らないが、通路を抜けだしたのは20人弱、それに進軍し

てしまった奴らを除けば10人にも満たない。

「相手してやるよ」

フェイトは急降下しつつも右手に剣を構え、左手からは氷の魔力を解放させ大きめの氷柱を6本具現化させている。

「時間が惜しい、出し惜しみは無しだぜ？」

そして銃声と魔法が激しい音を立て交差した。

反対側の道を走っていたレイとリードだが、あまりの人の多さに少し戸惑っていた。

そもそも初めて来た町で地理が把握できていないのに、後ろからは途切れることなく人が駆け足でこちらに合流するように流れてくる。今この先頭にいる人達の道行きによってこの人波は全て同じ方向に流れていくだろう。だからこそ先頭が道を間違えてしまえばそれだけで大渋滞と混乱になってしまう。

せめて町から出れば安全ならばいいが……

そんな事を考えていると、リードがレイの袖をクイクイと引っ張っているのに気付いた。

「どうしたの？」

すると今まで見えていた底なしのエメラルドグリーンの瞳に、どうしようもない恐れという感情が見えた。

「……ダメ、外に続くゲートからも悲鳴が聞こえる。それにフェイトが向かった方向に広場があるけど、そこから召喚獣の反応」

リードが告げた言葉にレイは言葉を無くした。どうやったのかは分からないが、リードは恐らく魔法で索敵したのだろう。

恐らく集音や、気配探知等を組み合わせた高度な魔法術式を編み出してくれたみたいだ。

その才能の深さに驚きたい所だが、真に恐怖すべきは召喚獣の存在だ。

「嘘でしょ？なんでそんな大掛かりなものがこんな辺境の国に……」

レイの絶句は当然のものである。召喚獣とは、その名の通りこの世界に遍く存在を呼び寄せたり、高度なものになれば次元を超えこの世界にいないものさえ呼び出せる術だ。

一般にスキルとしていうならば、大国に1人か2人いればいい方、という程レアな存在だしその軍事力で計るならば、強力な召喚獣は騎士と魔法師の大隊で討伐出来るか否か、といったレベルでもある。仮に普通程度、もしくは弱めの召喚獣であってもこの国でならば正規のギルドか騎士団と魔法師の連合を結成し討伐に当たるべき存在だ。

この騒ぎが伝わり討伐隊が結成される頃には、この町は跡形もないだろう。

そうなれば結論はただ1つ。

「ゲートに展開中の部隊は恐らく住民を逃がさないためのバリケードね。突破するしかない！」

リードもそう結論付けたのか、頷きで返してくれる。

「まだ避難している最中の人には悪いけれど、私達は戦える方に部類するのだからゲート突破に力を注ぐわよ」

強く頷き肯定してくれるリードは、なんだか頼もしく将来的にパートナーを組みたいと思える程安心感があった。

「じゃあ行くわよ、ゲートがあつた方の道案内をお願い」
「分かった」

言葉少なに2人は速度を上げ駆けだした。

「後続は放っておこう、さて、奴らの目的は」

そう、彼らは明らかに何かを追っていたのだ。

町の人達を射殺するわけでもなく、人質に取るわけでもなくひたすらに何かを追っていた。

それがこの町にいるトラブルメーカーに違いない。

「探すか、リリアウト」

どうせ何を探しているかは吐かないと確信していたので、戦闘において容赦はせずに屠った。

男達が向かっていった先を目指しフェイトは空を飛んでいく。少しすると広場近くに男達数人が集まっているのが見えた。……そして無残にも殺された人達の亡き骸も。

「ひでえ……」

とりあえず男達も屠っておこうと思いついて今度は雷撃のエネルギーを溜めていたが、違和感が突如として空に、地表に表れた。

「!?なんだ、この高密度の魔力の集束……魔力自体がここまでのエネルギーを持つなんて……まさか!？」

嫌な予感がフェイトの背筋を凍らす。

ここまで大規模な魔力の集まりで考えられるのは大規模魔法か、ならんかの儀式、そして召喚魔法だけである。

「嘘だろ……?なんでこの国に召喚士が来てるんだよ?何が目的なんだよ?」

魔力が更に重なり束となり、これはもう予感では済まなかった。もはや自分が首を突っ込んでいい事態ではない、国に頼るべきレベルだ。

「……くっ!隠れなきゃ的だ!」

急ぎ離れつつも通りに隠れ、見つからないようにしようとしたその矢先……

1つの薄暗い通りの中に男女が1人ずつ隠れているのを見つけた。

「申し訳ありません……私が外に出たい等と言わなければ」

上品な言葉使い、そして身に纏う空気そのものがこの町に合わない高貴さや気品を纏っている女性が、彼女の隣に守護するよう立ち

だかる男に話しかけていた。

「こちらこそ申し訳ない。何かあつても貴女を守り抜くことは誓っているが、それでもこの町の住人を守れなかつたことは口惜しい」
男は腰に提げた剣に右手を添え、辺りを警戒したまま女性に言葉を返す。

「さすがの私も不意を突かれた、――いや、そうなるように仕向けられていたのだらうな。綿密に練られた計画なのだらう、これほどの事を構えられるとなればどの国が仕向けたのかは絞れそうだが」
男はこの状況でも動じず、ただひたすらに隣の女性を守ることだけに全神経を集中させていた。

時は少しだけ遡り――

「この町で少し羽を休めたら、騎士学校へ急ごう。大分予定が押し込んでいる」

通り沿いのカフェにて男女が向かい合つてお茶を嗜んでいた。

ただそれだけだが、この2人があまりにも美男と美女であつたために通りからは余計な注目を集めていたし、この少しだけレトロな作りのカフェの外観にも相まつてまるで絵画の一部のようにも見える。とはいえ、周りの客は客でもあるが実際はこの男女の護衛でもあつた。

どこに行くにも護衛を外すことは許されず、このノンビリしたお茶の時間でさえ公務と公務の僅かな合間なのだ。

出されたお茶も護衛が毒見をする等、万全の態勢を整え普段のカフェを知っているものからすれば緊迫感溢れる有様だらう。

「ねえ？それにしても珍しいわ。いくら騎士に縁を有するとは言え学校です、それに異国の。貴方が出席を決めるなど珍しいです」
女性の方はこの話題について興味深く待っており、彼の真意を計りたいと思つている。付き合い自体はとも長く、信頼出来るものだが何を考え基準にし行動しているかはパートナーとして知っておき

たい部分でもある。

あるいは彼に対する独占欲といったものなのかもしれない。

「何年も前から誘いは受けていたんだ、校長は知人でもあったしそれに今年は都合がなんとかついたこともある。それに興味深い生徒についても紹介してもらえらるみたいだし、今となつては騎士王として後見も努めていかないとね」

やはり彼は彼らしい理由で一切の妥協も打算もなく、常に正しく清廉の鑑として決断をしていたのだ。

「でも、本当は・・・」

彼は私だけの騎士、とても優しいから。公務で疲れた私の羽休めに大義を付けてくれたというのも本当は知ってる。

だけどそれは私の心の中だけの秘密、彼に知られでもしたらきつと気を使わせてしまうから。

「いい旦那様よね」

そうとても小さな声で呟き、同時に心の中だけで苦笑とも微笑ともいえる微笑みをもらすのだった。

「まあ、もうそろそろ行こう。さすがに夕刻を押しまで訪問したら貴方にも迷惑になつてしまつたらう・・・」

その瞬間、風が、地が、光が、音が、全てを撒き込み押し流すような爆発がテラスで起きた。

「なっ！！！！？」

あまりの出来ごとに思考が一瞬刈り取られるが、それでも思考力を持ち直しさらに一瞬後に妻である、ユキ・アヴァロンを抱え脱出を試みるが・・・

その光量の中、自分の護衛についていた1人の騎士が姫に向けて剣を突きだすのが見えた。

『バカな！？まさか……これは仕組まれた？』

さすがに二重の動揺を誘う罠には驚いたが、それで易々と命を取らせる程騎士王の名は伊達ではない。

宝剣エクスカリバーにおいて裏切りの騎士の剣を弾き、追撃は諦め

すぐに爆発圏内から逃れようとしたが――

爆音でこれ以上ない程音が充滿しているこの空間に向けて、爆音に負けない程の多量の銃声が混ざった。

『そんな……』

これには騎士王と言えども捌ききれない。銃弾の雨、裏切りの凶刃、強大な爆発、この三重にしくまれた悪意によってついに騎士王は部下を守りきることが出来ず、自身も手傷を負ってしまった。

それからは逃げる途中に確認したことが、同時刻爆発が同時に起きていたため無差別テロという見解が強く、更に街中に突如現れた武装兵団によつて町の警備機能は完全に沈黙していた。

さらにここから考えられるのは、あのテラス以外にも立ち寄りそうな、いや立ち寄るように仕向けられていた個所全てに爆弾が設置しており、その結果多くの関係の無い命を巻き込んでしまったということだった。

だが、後悔しても遅い、それに後悔するにはまだ早い。

彼が抱きかかえ走る腕の中には愛する妻、ユキ・アヴァロンがいるのだ。

奇跡的にも彼女は無傷で救い出すことが出来たが、これは彼女と自分を狙った暗殺に間違いはない。

一刻も早く町から離れ態勢を立て直したいが、ユキ・アヴァロンを連れているため強硬策が取れない。

敵の人数は未だ未知数、敵の戦力に到つても未知数。

その状況で守りながら戦い、活路を拓くには荷が重い。何より銃弾をかわしきれずに数発受けてしまっている。

いくら騎士王と呼ばれようが私は人である。銃弾を受ければ痛みを感じるし、死に至ることだってある。

ドラゴンを何体討伐しようが人である以上限界があるのだ。

幸いにも追手については何とかかわしきれたようだ。薄暗く細い路地に彼女を庇うように立ち、通りに注意を凝らす。

「申し訳ありません……私が外に出たい等と言わなければ」

彼女の謝る言葉は本来であれば聞きたくはない。

彼女が悪いのではなく、悪いのは彼女を狙い世間の混乱をつき私利私欲のために蔓延る人間達なのだ。

そんな口惜しい思いすら抱くが、現状の打開策は浮かんでこない。

このまま隠れ続けていてもいずれは見つかってしまうだろうし、それならばいつそのこと打って出たくもなる。

そんな時だった。不意に魔力の流れが急速に高まり、空が悲鳴を上げ、大地が震えあがったのが。

「まさか……召喚魔法だと!？」

連中の本気の度合いが計りしれる。召喚士まで用意してくるのなら、は確実に私達を葬る算段なのだろう。

例え町1つ消滅させようとも、それが証拠として提出されようと全て私達がいなくなれば薦められる、そう本気で思っている。そんな浅慮で短絡で、例えようのない悪賊が。

「アルト様、アルト様だけでもお逃げ下さい。私を連れてでは逃げ切れませぬ、どうか……どうか貴方様だけでもご無事で」

彼女が決死の想いでこちらの身を案じてくれているのは、痛いほど、身が引き裂かれる程痛く分かる。

だが、それに頷くわけには絶対にいかない。

「私は騎士王である以前に、ユキ・アヴァロンの騎士です。王という身分すら本来は欲したものではない、私にはただ貴女がいてくれればいいのです。ユキ、分かってくれ」

これ以上彼女を不安がらせてもしょうがない。召喚獣などこれ以上ない位状況を悪化させてくれたが、苦難ならいつも立ち向かい乗り越えてきた。

此度だって

「走るぞ、絶対にこの手を離さず着いてきてく……」
言葉途中でアルトは空中から近づく何かに気付いた。

この風切り音は、飛行魔法？連中は魔法師まで用意していたのか。
と、内心で臍を噛みしめたくなるような思いだったが冷静に対応する。

抱きかけたユキを降ろし、剣に手を携え迎撃の構えを取り、上空からの相手を視認すると

「学生？」

紛れもない、間違いようもない。

今日訪れるはずだった学校に所属する者の証である、すなわち騎士である証明の鮮烈な赤色の制服に身を包んだ少年がこちらへ降り立ってきたのだった。

裏通りでの邂逅

スタンツ、と中空から着地したフェイトの前には上空から見たとおり2人の男女が隠れていた。

この魔力の流れは例え一般人で魔力について分からなくても、単純に嫌な空気が渦巻いていると近くできる程圧倒的なものだ。

ただ隠れているだけでやり過ぎす事は出来ないと思い、この2人も逃がそうと思つて着地したのはいいが――

隙がなかった。腰に提げた剣を見るからに男性はおそらく騎士かそれに近いものであるのが分かったし、その奥に庇うように隠されている女性はきつとこの男性にとつてとても大事な人なのだろう。

気配の探り方が尋常じゃない。

かつてどんな相手と対峙した時にも感じなかった戦慄が、この目の前の男性から発せられているのだ。

緊張に緊張が重なり、声の掛け方を忘れてしまったように喉が震え、唇は張り付いてしまったかのように決して開かない。

何故こんな圧倒的なオーラを持つ男性がこんな所にいるんだ？疑念は留まる事を知らず肥大化していき、焦燥だけが募る。

と、そんな折、向こうから声を掛けてきた。

「その制服を見るからには君は騎士学校ナイトオブ라운드의生徒だと思ふのだが、間違いないな？年のため聞くが飛行魔法まで使ひ私の目の前に来たという事は君は敵か？味方か？」

男性から発せられた鋭い問いかけに、フェイトは驚きを通り越して絶句してしまった。

制服が有名なのは分かる、だがこの男性の問いかけではまるでこの騒ぎの中心が自分達である、と言を裏返せば言っているようなものだ。

本当に一体この男性は何物なんだろ――

フェイトはそこまで考えた上で薄暗い通りに佇む男性を注視した結

果、

「ま、まさか……アルト・アヴァロン？」

その答えに辿り着いた。

アルト・アヴァロンは騎士王として世界的に有名だが、それでも顔を知っていたのは一重に騎士としての憧れに他ならない。

騎士学校の生徒はおおよそ騎士王アルト・アヴァロンを崇拜しているが、それでもフェイトの崇拜具合は他生徒を凌駕する。

何せ幼い頃より焦がれていた理想の人物、絵本の中で夢見た理想の騎士、フェイトが目指す遥か遠き理想という名の目標。

その全てを集約し、過去未来全てを含めた上で世界最高と呼べる騎士がアルト・アヴァロンなのだ。

そしてフェイトの驚愕に満ちた表情や、その言動から敵であるという可能性が極小まで減り警戒を緩めてくれた。

「いかにも、アルト・アヴァロンだ。内密の公務によりこの地に来ていたが、この通り巻き込まれて、いやむしろこの町を巻き込んでしまった。すまないが手を貸してもらえないか？」

あの騎士王が自分に手を貸してくれ、と言っているのだ。これは国の騎士隊に任命されることよりも、ましてや国王の護衛を拝命するよりも高貴で名誉あることかもしれない。

フェイトは一にも二もなく膝を付き頭を垂れた。

「ハッ！不詳フェイト・セーブ、騎士王アルト・アヴァロン様の命を我が全霊を懸け尽くすことをここに誓い、ここに拝命致します！」
運命というものがあるのならば、運命の神に感謝をしたい。

騎士学校の一生徒の身分である自分が、任命されたのだ。もはやこれは家訓として後の世まで受け継がせたい程の誉れだ。

「あまり固くならないでくれ、ここは戦場だ、礼よりも皆が命を大切にしている場面だ。だからこそ力を尽くしてもらいたい」

「ハッ！申し訳ありません！」

「……」

アルトも後ろにいた女性もやや呆れ顔のため息をつきそうになった

が、その瞬間、膨大なまでに高まっていた魔力が一条の光となり天と地を繋ぐ柱となり広場に顕現した。

「ついにきたか」

「あれが……」

「召喚獣へカントケイル、ですね」

召喚獣へカントケイル、最大の武器はその巨大さであり、歴史上確認されたものは200mを超えるものもいたと言われる巨人族だ。もつとも、今回召喚されたものは過去最大規模のものではなく50m程と最悪は免れているが、それでも50mである。

一般に大きいと言われるキリンの全長はおおよそ3・5m、巨大と言われるモンスター類ではボツカという大口竜が10m程、ブラキオレイドスと呼ばれる古代種が25m程と現在確認されている大型族でもこの巨人と比べれば半分程でしかない。

召喚獣の名に恥じない化物を呼び出してきた相手は、紛れもなく一流だ。

やはり、召喚前から判っていたことだが勝てる相手ではない。

正式にこのお2人をこの町から無事退避させることこそが、任務であり最上の策でもある。

町の復興等はこの際二の次で、町の人の命が半数以上助かれればまさに全霊を賭した結果とも言える。

そう覚悟を決め、召喚獣へカントケイルからアルトに視線を戻すと既にアルトはフェイトの方に視線を戻していた。

「時間がないから手短かに作戦を伝える、私が囿になり時間をかせぐからその間にフェイト、君はユキ・アヴァロンを飛行魔法を使いなるべく遠く、出来れば国の保護を求められる地まで護衛し、然る後討伐隊の編成を直訴、この事態の鎮圧に向けてくれ」

やはりと言うべきか、アルトの後ろに隠されていた女性はユキ・アヴァロンその人だった。

グランドプリンセスと呼ばれ、姫の中の姫と世界から羨望を集める

神秘と清純の象徴。

その圧倒的カリスマはかの聖母マリア、聖女ジャンヌダルクと比較される程尊き存在なのだ。

「ではアルト様は？貴方は本当に無事に帰ってこれるとお思いなのですか？」

アルトは無言を貫き、それが肯定を示すことは明白だった。

国を挙げて討伐すべき存在なのだ、いかに彼のアルト・アヴァロンとはいえたった1人では勝機すら見えない。

それにユキの悲痛な叫び、それはアルトが負っている傷のことだ。自分を庇ったがために負った銃傷はまだ治っていないどころか止血すらしていない。こんな状況では普段の力の半分が出せればいい方だろう。

それでもアルトは揺るがない、その意志、その在り方、その雄姿、その魂の全てが彼を駆り立てる。

『王女を守れ』と

「作戦は今言った通り変更ないし、異論も挟ませない。では時間だ、……フェイト君、ユキを頼んだぞ」

そう言い残し絶対の信頼という呪いに近いような宣告を残し、アルトは通りを抜け召喚獣ヘカントケイルを迎え撃とうとする。

……だが、俺は、間違っている！そう叫んだ。

「予想以上に数が多い、100……は絶対に超えているわね」

ゲート前に先回りしたレイとリードはゲートに立ち塞がる敵を一様に観察し、純粹に戦力を測っていた。

敵兵は積極的に町の住民を攻撃はしないが、ゲートに近づく者に対しては容赦のない銃撃を浴びせるため、町の人々はゲートから距離を取りつつも外に逃げだすことが適わなかった。

敵はあくまでも住民には興味はなく、ターゲットのみを逃がさない構えなのだ。住民の列の後方ではきつとパニックが広がっているだろうが、それでも前方は前に押し出されたら銃弾にさらされるのだ。命の綱引きであれば、絶対に前に出ようとはしなかった。

だが、リードが察知してくれた召喚の気配は今も濃厚に高まっている。先までは気付きにくかったが、今では気づける程に。

それは時間が残されていないことでもあった。ゲートは四方東西南北に存在するが、フェイトが向かった西方面は残念ながら手が足りないし、そこにいる住民を逃がすことはできない。

同じように南北のゲートも自分達のように騎士候補生や魔法師候補生、もしくは軍隊やギルドの人達がたまたま町に来ておりゲート解放に向かってくれていると信じる他はない。

今、東のゲートには私とリードしかないのだ。

「レイ、レイ。私大規模範囲の地表荒削隆起魔法『アースクエイク』なら使えるよ」

と、隣から思ってもみない言葉が飛び出してきた。

先ほど攻撃魔法は苦手、と言っていた彼女からどんな心変わりでの言葉が出てきたのか心情の変化を察するには余りあるが、今の状況で言えばその攻撃魔法は救世主とも言える程逆転を狙える。

「分かった、詳しくは後で聞かせてもらおうから今は魔法の説明だけして。発動までのラグと問題点は？」

レイも有名な魔法についてならば基礎的な知識を修めてはいるが、それでも自身が魔法師ではないため詳しくは知らない。

アースクエイクが本来上級魔法に入ること、それが範囲系魔法であれば威力に優れていることも分かっているが、発動手順、発動秒数、リスク等については知識がない。

「この呪文は魔力をたくさん使うから多分こっちの存在に気づかれ

る。それで銃を撃たれたらドツカーン。ゲームオーバー」

やっぱりリードは天才でもあるだろうが、それに際してなのか言動や行動が幼い感じが見受けられたりする。

これからも付き合いがあるのならば、熟知しておいた方がよさそうな性格だ。

「それで？」

「だから完成までの20秒守ってくればあの門の前にいる人達は全員バツコンバツコンと倒せるよ」

20秒、詠唱に集中しているリードを守れば勝ちだ。

……しかし20秒でもある。おそらく5秒は魔力集束のため敵も見つけられないからおよそ15秒が本来のタイム。

しかし、15秒間敵100人以上の銃弾を捌ききる等不可能だ。

ゲートが見える位置で発動しなければ最悪ゲート事倒壊させ本末転倒になり得るし、かと言って詠唱中に動かせば集中が途切れまた1からやり直した。

そうなればここから導き出せる作戦は1つ。

「私が囷になって引き付ける、だからあなたはなんとんでも詠唱を完成させて殲滅して。 - -そして出来れば町の人の避難を手伝ってあげて」

そう、レイが覚悟を決めるしかなかった。

「いいの？」

それは当然の問い、だがリードも深く反対しているわけではないので形式的な問い、というのが本当の所だろう。

それ以外に手段がないならば、それが騎士を目指した少女の覚悟ならば、それに答えるのが魔法師である。

騎士と魔法師が積み重ね、今では数多くのパートナーが結成されている騎士と魔法師の関係。

騎士が守ってくれるから、魔法師が力を振り絞れる。

魔法師が決めてくれるから、騎士が命を懸けられる。

それは騎士が姫に、主に忠誠を誓う事とはまた違う次元の忠誠にも似た信頼という絆。

今、彼女達の間には熟練したパートナー達が辿り着く極みのような場所に身をおいていた。

「任せた」

「任された」

それはどちらが先に言葉を発したのだろうか？だが、どちらが先でも同じ言葉が紡ぎだされ、繋がれたことだろう。

そして騎士たる少女は敵に向かい鮮烈な赤を刻むべく駆けだした。

「フツ！」

先制の一撃でまず敵の意識をこちら側に全て向け、他方面の意識を刈り取る。

懐から今日買ったばかりのダガーを鋭く投擲し、喉をかき切る。

突然の敵襲だが、敵の修練度もさしたるものでレイに視線を向けるや否やすぐに迎撃の構えへと遷す。

この間僅か3秒、まだたったの3秒しか稼げていないのだ。完成にはおよそ7倍、後17秒かかる。

攪乱したため魔力集中しているリードを見つけ出すのに多めに見積もって5秒と踏んでもあと12秒は自力で稼がなくてはならないのだ。

それなのに――

こちらに向けられた銃口は無機質に、そして残酷な死の運命を告げる悪魔の武器でしかない。

その数は100以上となれば運命の女神と奇跡の女神を連れてこなければ話にならないだろう。

だが、レイはそれでも焦らない。焦りは過剰な緊張や余分な力を生む元ともなるし、何より自分には運命の女神よりも奇跡の女神よりも信じるべき自身の血の滲む修練の積み重ねがある。

例えばあと12秒の時間が必要だろうと関係ない。今、自分が出る

ことをやるだけだ。

「土竜！」

レイは自分の騎士剣を地面へと強く突き刺し、その勢いにより土砂を巻き上げる。

銃弾数発ならばこの土砂の盾により一時的に凌げるし、何よりこの土砂により相手からの目を少しの間だけ眩ますことができる。

今は恥も何もない、もとより騎士とは泥に塗れるものなのだ。現実と理想は違つと認識しているからこそ泥に塗れることにもレイは躊躇しない。

「どこだ！」

そして目論見通り敵の視界は奪つた。……だが、まだ10秒以上ある中絶望的に足りない。

レイは次策以降も持てる力の全てを発動し続けなければ生き残ることとは到底適わないのだ。

「閃昏一擲！」

今度は騎士剣を高速で振り抜くことによる空気中の衝撃波、すなわち鎌鼬を生み出し敵を襲う。

まだレイでは膂力が足りず、剣の振り抜き後に硬直が残るがそれでも騎士として剣を扱う者の中では貴重な遠距離技だ。

レイがまだ騎士学校1年とはいえ、卓越した剣技をもつ事は本人の努力の集大成であろう。

敵軍は鎌鼬を受け確かに態勢を崩したが、それでも全体を襲うことは出来なかつたため無傷の部隊は尚もレイを銃口で狙い続ける。

「まだまだ！風神」

レイは騎士剣を右手で持ちその場で大きく、そして高速で回転し始める。

その剣によつて真空の渦を作りだし、放たれた弾丸を弾き飛ばす。

だが、風の力によつて弾き飛ばしてはいるものの、弾丸が当たる度に風は薄くなるし全部を弾ける訳でもないのでこの2秒程の間にす

でに十数度は弾丸がレイを掠めている。

そして1つは左の腿へと貫通し、回転は終息を見せ始めていた。ここまで稼いだ総合計時間が9秒、まだ、まだ足りない。

だが、もうレイは限界だった。足に銃弾を受け走ることは叶わない。さすれば銃弾を弾くしかないが秒間100発は下らない銃撃の中生き残れる程もう体力はない。

ならば、最後の技を放つ他選択は残されていなかった。

「!!!っ、雷神!!!」

そしてレイが放った技とは、風神により加速、遠心力を増していた自らの分身とも言える騎士剣を敵目掛けて全力で投擲した。

その破壊力は小型の爆弾にも相当するエネルギーが詰まっており、剣が敵地を貫いた瞬間、ついに敵陣を崩すことに成功した。

『これで12秒……ああ、後3秒足りなかつたな』

確かに敵陣を崩すことに成功はした、だがそれでも一部の兵はまだこちらに銃口を構えたままだ。

そしてその引き金に力が入り、弾き絞られる様をレイは遠く、ゆっくりとした時間の中眺めていた。

『なんでこんなにゆっくり見えるんだろう？あんなに敵が引き金引くのが遅いなら私全員切り倒せ……違うか、これが噂で聞く走馬灯ってやつなのかな』

人は死の間際あらゆる時がゆっくりと流れ、それでも意識だけははつきりしているためこの時間は生者に残された最後の時間、とも言われている。

人によっては無限にも感じ、人によって過去を思い出す等様々な事が聞かされているが、どれにも共通しているのは考えている、ということだった。

記憶を思い出していることも、無限の時間を使い自らの想いを纏め上げることも全て自らの脳が限界まで引き出した思考力の他ならなためだ。

そして、レイが考えたことは、

『死にたくない、……死にたくないよ！私はまだ騎士になってもいいし、ピアはもつともつと騎士には遠い、守ってあげなきゃいけない妹なんだから！……ああ、そっか、ピアへの本当の気持ちっ守ってあげなかいけない、そこから始まったんだっけ。……いつからかな、いつからすれ違っちゃったのかな？ピア、ピア！ごめんね、こんなお姉ちゃんですらに……ごめんね……』

そして、無限は終わりを迎え無慈悲な死神の銃弾がレイの意識を刈り取った。

生命

東ゲート前、アルト・アヴァロン、ユキ・アヴァロン暗殺を目論むとある国家が仕向けた兵隊によって占拠されていた個所だが、つい数秒前までは突如として表れた騎士学校の女生徒により隊列を崩されるあまりまでにあつた。

しかし、その女生徒の活躍むなくおよそ10秒程でその若き命を散らしてしまった。

誰もがそう思つた瞬間だつた。

少女へと降りしきる銃弾を全て槍にて撃ち払い、その颯爽とした身のこなしにおいて少女を戦闘区域より脱出させていた。

そのあまりの早業に見る事しか出来なかつた町の住民、そして少女に銃を撃つていた兵達の誰もが呆気にとられていた。

迫りくる弾幕のような銃弾の雨霰でさえ彼を打ち取ることとは適わず、少女を抱きかかえ尚建物の屋上へと軽々跳躍する様は騎士ではなく、槍を極めし旅人の装束を身に纏つていた。

そして、その誰もが活目した寸劇の間を惜しみ今ここに大規模範囲魔法を完成させた少女がいた。

「アースクエイク!!!」

瞬間、ゲート付近の地面は突如重力に逆らいまるで意思をもつたかのごとく捲れ上がり、隣のアスファルトも土砂にも手を繋ぐかの如く次々と肥大化し敵を飲み込む。

敵兵にとってこの魔法は既に避けられる範囲ではなく、よしんば避けられる範囲にいたとしても寸先までの少女騎士との戦闘、謎の男の乱入によって統制を失つていたため為す術なく土砂流へと飲み込まれ、押し潰され、そして引き裂かれた。

ついに東ゲート前のバリケードは破られた。

まるで激しい爆撃を受けたかの如く地面は捲られ、大きな陥没痕を残していたがそれよりもまずはこのゲートが開いたという事が大事だった。

自分が見せた魔法に酔いしれる事もなく、リードは声を出す。

「皆、逃げて」

それまで騎士と魔法師の活躍により金縛りのように観客とかがしていた町の住民が、また息吹を吹き返したかのように皆一様にゲートから外を目指した。

「レイ、どこ？」

だが、リードは避難するでもなくレイを探す。

先ほどまで自分を信じ守り抜いてくれたパートナーを見捨てて逃げる事は、リードには出来ない。

それにレイは死んだ訳でもないのだ。誰だか分らなかったが、とにかくレイは助けてもらっている。

だから後は自分が探すだけ……と、思っていたら。

「おや、お譲ちゃんがさっきの魔法を使ったのか」

そう背後から呼びかけられた。

突如として沸き上がった気配リードは驚き、急ぎ振り返るが、そこには果たして探し求めていた人物がいた。

「あなたね？さっきレイを助けてくれたのは。どうもありがとう」

ペコリとお人形のようにお辞儀をし、旅人装束の男に礼をいう。

「なーに、間に合ってよかったぜ。南ゲートは既に解放しておいたし、それで順に東、北、西って回ってただけだ。それでも格好良かったぜ？騎士を目指している女の子の凛々しさはよ」

どこことなく人を喰ってかかるような性格のようだが、腕は確かなようだ。

恐らくこのことそう警備の質は変わらない南ゲートをたつた1人で解放してきたのだ。

それに何よりレイをあんの状況から救い出せたのだから疑いようもない。

「レイとは一杯約束してたから。それでレイは？」

リードが小さく小首を傾げるとその方面では、まさにお人形のようにしか見えない。

トーンがゆっくりしていることも相まって、男は脱力させながら答える。

「あのお嬢さんなら、ほら、俺の背中でごっすり」

もっともぐっすりというのは気絶していることなのだが、それはこの際言及しない。

丁寧にレイを下ろし、リードは地面に座らされたレイの手をギュッと握りしめる。

「何があっても離すなよ？命を懸けて結ばれるパートナーなんざこの世界にだって数える程しかない。そんな巡り合わせに感謝して、何があってもその手は離すなよ？」

そう、とても寂しげにリードに語りかける男の目には透明な雫が奥に隠されていそうだった。

今という名の孤独を背負う槍使いの旅人は、そんな姿を見せたくないのか直ぐに後ろを向いて顔を背けてしまう。

「縁があつたらまた会おうな、出来ればお譲ちゃん達が素敵なレディになつた時位にな。んじゃな」

それだけいい残すと槍使いの旅人は、建物の屋上へと飛び移り、屋根と屋根を道にするかの如く跳躍を重ね北ゲートを目指していった。

「行っちゃった。孤独な旅人さん、また会おうね」

色々な事が重なり、レイを失うかとまで思ったが、2人は無事に町を脱出することに成功する。

「今、間違っていると、そう言ったか？」

アルトが作戦を断定し、そして自身が生涯を懸けて守り抜くと決めた姫を一時的にはいえ託すと決めた騎士から出てきた言葉は、反発だった。

「言いました、貴方は間違っている」

既に召喚獣ヘカントケイルが顕臨し、一刻の猶予もないというのにこの少年騎士は異論を挟んできた。

「フェイト、今の言動見逃してもらえるとと思うな。答え次第では諸君を切り捨てねばならない」

アルトが放つのは殺気に等しい。重濃なプレッシャーはこちらを射るように棘があり、その鋭さと重みはとても間違った答えや冗談では済まされないだろう。

だが、フェイトはそれだけのプレッシャーにも全く怯むことなくアルトへと吼える。

「俺が知っているアルト・アヴァロンという騎士王はどんな状況でも誓いを立てた姫を守り抜き、どんな困難でも乗り越えてきた騎士の鑑だ。ならばこの場での最善策は、『フェイト・セーブが囷となり、アルト・アヴァロン、及びユキ・アヴァロンの撤退の援助』が至上のはずだ！！」

そう、本来であればこれが最上。いかに召喚獣とはいえ飛行魔法を使いこなす騎士、となればよほどその辺の魔法師や騎士よりも約に立つと考える。

しかし、アルトは自分の手傷を計算にいれ飛行魔法が使えるという理由だけでユキを手放し、自らは死地に殉じると言っているのだ。フェイトにはそれが許せなかった。

「……確かにもっともでもある、だが私は君の能力を知らないし知る時間もない、なればこそ安全策を取るべきだ。少なくとも私ならばあの召喚獣にも対抗出来よう」

だが、アルトの結論は覆らなかった。フェイトの正論すらアルトには届かない、フェイトの力はアルトに及ばないまでもそこいらの魔

法師よりも、騎士よりもあるというのに言葉すら届かないジレンマ。だからこそフェイトは、

「アルト王、傷を見せて下さい、何を言っても聞き入れていただけないのならばせめて治癒魔法だけでも掛けてからお臨み下さい」
これにはアルト、ユキ共に驚いた。

治癒魔法は飛行魔法と違って才能さえあれば誰でも使えるものだ。しかしその才能こそ希少と呼ばれる類でもある。

人間は本来、火、水、風、土の4大元素のいずれかを自らの魂に刻みこまれて生まれてくる。

複数元素を使いこなすものもいるし、中には4大元素全てを扱う者もいる。

しかし、治癒魔法はその根源が違うのだ。

「生命」という種としての運命を背負った、素質ある者にしか治癒は行えない。

例えば飛行魔法を細かく分解すれば、火では飛ぶための熱量エネルギーを生成することで飛行し、水は体内の水分を軽くし、空気中の水素と同調させる。風ならば飛行は風に語りかければいいし、土ならば重力制御が飛行魔法という概念になる。

だが、どの元素でも治癒を行えないのは人という種族が複雑な体組織、遺伝子という名の魂という存在にまで辿り着いたためだ。

かろうじて水の魔法系統では肉体の再生という事が出来る、といった報告もあるが『再生』と『治癒』では効果が違うのだ。

例えば血を流していたとして『再生』ならば傷を塞ぐことができる。確かにそれでも十分に思える。

だが、『治癒』は傷を塞ぎ、失った血液すら元の状態へと戻し、体力と一般的に認識されている生命エネルギーそのものも回復させる。よって高度なものになれば瀕死の人間を『治癒』することも可能なのだ。

そして、フェイトは『再生』魔法ではなく『治癒』魔法と言を出し

た。

アルトもユキも、もうフェイトを疑うような事はしない。騎士として誇りを懸けているだろう目の前の少年はまず間違はなく、天啓と呼べる程の運命を背負って今ここにて巡り合ったのだと。

「今度ゆっくり時間をとって話したいものだ。 - - 治癒を頼む」

そしてアルトは今なお血を流し続けている傷口を、フェイトに託してくれた。

「お任せ下さい」

フェイトはすぐに治癒魔法をかけ、あっという間に治癒をおえた。

「さて、相変わらず時間はない。ヘカントケイルは西ゲートを潰し、後は手回り次第に破壊の限りを尽くすだろう。そこで、やはり私が奴の討伐を請け負おうと思う」

結局の所治癒魔法をかけた所でアルトの結論は変わらなかった。いや、結果は変わってくるのかもしれないが。

「本来ならば君程の騎士がいれば戦力に数えたい所だが、ユキを1人にする訳にはいかない。改めてだがユキを頼む」

アルトとユキから信頼の眼差しを送られ、フェイトの気持ちはかつてない程高ぶっていた。

「任せて下さい、召喚獣でもなければ遅れは取りませんよ。 - - -

- アルト王、ご無事で」

「うむ」

そしてついにパーティーは解散し、アルト王が召喚獣ヘカントケイルの討伐へ、フェイトがグランドプリンセス・ユキを護衛することになった。

「姫、急ぎましょう。飛行魔法は確かに早いですが今飛べば我らの居所を相手に教えるだけになります。ご不便をおかけ致しますが、私が前を預かり決して姫には手出しさせませぬ、何卒ご安心を」

クスクスと笑いながらこちらに手を差し出すユキは、まるで少女のように朗らかで、つい見惚れてしまう程でもあった。

「信頼します、アルトが選んだ小さな騎士。あなたにも神の御加護を」

もしかしたら、とフェイトは少しだけ思った。グランドプリンセスと呼ばれるこのお姫様は、本来もつと快活で少女のような人なのではないか？そう思った。

この笑顔、小さなと付けた何気ないジョーク、どれもが責務によって少女としての自分を捧げ抑えつけてこなければ本来の快活な素顔が見れたのでは、と思える程には人格が見えていた。

「行きましよう、貴女の誉れ高き騎士アルト・アヴァロンを信じてそしてアルトに僅かばかり遅れ、フェイトとユキも路地から飛び出し、町の外へと脱出を試みる。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4688y/>

騎士学校の俺と俺だけの姫様

2011年12月11日17時46分発行